
勇者が敵になりました

青藍蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者が敵になりました

【Nコード】

N5427W

【作者名】

青藍蒼

【あらすじ】

勇者から告白されたのは俺——ではなく幼馴染の子爵令嬢メイリー・ジャミル。しかし、美人だが彼女はとてつもない変わり者。奇女メイリーのあだ名は伊達じゃない。一方俺は、ミスター平凡なモブ男。何をとち狂ったのかメイリーは勇者を振ったかと思いきや俺と結婚するとかぬかすし……勇者敵とか、マジ勘弁！肉食系女子と草食系男子の恋愛もの。

登場人物（随時、更新）

メイン

シャド・スペクター

背が高いだけを取り柄の平凡な青年。御年十八歳。ツツコミ気質な草食系男子。

勇者の敵になった上に、奇女と名高いメイリーと結婚する予定（？）。

名前の由来、英語の影と幽霊。

メイリー・ジャミル

美人で天才的に頭は良いけど、変わり者。御年十八歳。周りからがつちり固めていく肉食系女子。

勇者に求婚されたが興味ないので、視界にも入れない。

名前の由来、中国語とアラビア語の美しい。

勇者

ハイラント・ヴァリエンテ。御年二十一歳。イケメン、金髪。噛ませ犬。

名前の由来、ドイツ語の救世主とスペイン語の勇敢。

サブ

ルック・テイク

モブ仲間。シャドの親友。身長は同じくらい、赤毛。顔も同じくらいばんやり。

名前の由来、英語でそっくりの意味から拝借。

プレザント・スペクター

髭の立派な太つちよ紳士。シャドの父親。伯爵。

名前の由来、英語の楽しい。

シュロム・スペクター

シャドの実兄。次期スペクター伯爵。

騎士団とかで活躍している人。ツンデレ体質。初恋は、メイリー。

名前の由来は、フランス語の超人。

リーフ・スペクター

シャドの母親。伯爵夫人。

シャドの思い切りの良さと強情なところはこの人譲り。現在、美を求めて旅行中。

名前の由来、アラビア語の風。

ドルーク・ジャミル

娘ラブながりがり紳士。メイリーの父親。子爵。

名前の由来、ロシア語の友達。

シレーナ・ジャミル

メイリーに良く似た外見をしているものこちら、素敵美人。子爵夫人。

名前の由来、イタリア語の人魚。

王さま

国の王さま。

パパラッチ（眼鏡っ子）

眼鏡を外したら可愛いフラグ持ち？ 空気は読めない。

ハボン・メモリア

異世界転生者。日本の知識をこの世界に著者として広めた人。
名前の由来、スペイン語の日本と記憶。

ラッヘン

シャド行き付けの古本屋の店主。年老いてもふさふさな毛は男たちの憧れ。

名前の由来、ドイツ語の笑う。

01・今日から勇者の敵（前書き）

浮気してみました、不定期更新！

01・今日から勇者の敵

「私と結婚してくれないか？」

人目をはばかることなくそう言った男に拍手したい（したら怒られるからしないよ、空気読むよ）。

とにかく、あんた偉いよ。うん！！

幼馴染のメイリー・ジャミルは美人だが生憎と奇人過ぎて嫁の貰い手がこのままだとなさそうだし、この告白してきた男は魔王を倒した流行りの勇者だ。有名人だ。

子爵の令嬢から勇者夫人とかどんだけ出世だよ、すげえな！！！！

あの……もし、おこぼれがあったら、その時はよろしくお願いします！

と、俺ことシャド・スペクターは絹のハンカチで涙を拭くフリをしながらニヨニヨと事の成り行きを見守っていたわけである。限りなく無関係に近い第三者だった。美味しいとこ見放題のモブだった。

結婚式には勇者の仲間とか来るのかなとか、「俺呼ばれるよね!？」とか、ウキウキしてたのに……。

なの、に！

「無理だな、お前が誰かわたしは知らないし、何よりそのそれと結婚予定だ。他を当たって貰おう」

後ろにも横にもそれらしい人物は居ない。もしや、メイリーが指差すのは――俺？

「おん？」

指から逃げる。つつつ。

もう一度、指から逃げる。つつつ。

(ゆ、指が追って来るだー!!)

なんということだろうか、逃げても逃げても黒く塗られた爪は俺を追いかけて来る。

「ちょこまか動くな」

何言つてんだこいつと思ひながら見た彼女の顔が眞面目そのもので——というか、メイリーが嘘を口にしたことなど生まれてこのかた十八年一緒に居るが聞いたことがない。

目を瞬かせる。

マジで俺とお前でランデブー？

ちゅう……

(ちよ、やめて、やめて勇者。睨まないでええええええええええええええええ)

勇者超睨んでるんですけど！
待て、アイム被害者。君と同じ仲間だよ！

目を輝かせながら訴える。俺は知らない、無実だ。君の恋を絶賛の応援しているよ。

「こんな薄っぺらい顔立ちの背が高いぐらいしか、取り柄もなさそうなのどこがいいと!」

悪かつたな、背だけ無駄に高くて。顔だつてお前らと比べると平平凡凡だよ。言わせんな、泣けるから！

ちきしょう、仲間だと思ったのに、お前マジ敵。

だがしかし、攻撃とかやめてください。死にます。剣を向けない、睨まない！

「お前には関係ないだろう、別に」

メイリーは鼻をフンと鳴らし、俺の首根っこを掴む。

「行くぞ」と言われて俺は引つ張られるようにして引きずられる。

その間も、勇者はひたすら俺を睨んでいた。

野次馬たちもざわざわ騒ぐ。

そりゃあそつだよな、勇者の告白を断るなんてありえないし。

でもさ、何が一番ありえないかっていうと。

「結婚つて、俺何も知らんのだけれども」

「わたしは嘘は吐かない、おじ上にでも聞け」

「でーすーよーねー」

本日、平凡の中の平凡。ミスター平凡なモブ男シャドは勇者を敵にした。

ふ、不可抗力なんだけどな、げふげふ。よし、パパンに事の顛末を聞いてこよう。

でない俺——勇者に殺される。

01・今日から勇者の敵（後書き）

今度こそギャグを目指す！

02・人生は日陰道一直線

「サプライズ結婚の予定だったのに……」

メイリーをジャミル家へ送り届けてから猛ダッシュで帰った俺へのこの発言は、殴ってもいいという了解のサインと受け取っていいのかな！？

勇者と思しき殺害行為ぼうがいを帰るまでに大量に受けた俺に対して酷いんじゃない？

何残念そうに言ってたよ、残念がるなよ！

「メイリーちゃん美人だし、頭良いし、やったね。よ、三国一の花婿！」

父親（ニコニコと笑いながら）の発言に俺は言葉を失くす。拳がプルプルと震えてしかたない。

「で、いつ俺に報告予定だったのかな？ ん？ 言ってみ」

「前日に、明日結婚式って言われたら楽しくない？」

（こんのおお、髭でぶがああああああ）

何が、「前日に、明日結婚式って言われたら楽しくない？」だ。楽しくねえよ、寝耳に水もいいとこだよ！ こいつ馬鹿じゃないの、馬鹿でしょー！

というか、どうやって前日まで隠し通す気だよ。自分の息子をどれだけ馬鹿だといいつ思ってたんだ！

髭と脂肪を必要以上に蓄えた、蓄えに蓄えたこのスペクター伯爵が俺の親父。

かなりちゃめつけの強い男だとは知っていたがまさか自分の息子の結婚式をサプライズ演出しようとするほど頭がいかれていたとは知らなかった。

（知りたくもなかった！）

「別に、婿養子ぐらいいいじゃない。自由恋愛が基本の世の中で次男なのに、爵位継げるなんてラッキーだとも思えば」

「はぁ？ 婿養子なの、俺！？」

メイリーと結婚するだけでなく、婿養子だと。勇者を敵に回した上に、これ以上とんだけ俺は日陰道を生きる予定なんだ。

「当たり前でしょ、メイリーちゃん一人っ子だし」

くるんくると親父は髭を弄る。

今、大事な話なんだから弄るなよ、こんぬやろーめ。

「しかし、まいったね。勇者」

ポンッと四角い板が机から取り出される。

「データ新聞？」

データ新聞とは一度、基盤を買えば常に最新の情報が本体に送信されてきて見ることが出来るすぐれものだ。もちろん、結構良いお値段がするが一年分の契約料金が紙新聞を買うよりかなり格安で済む上に一年分の情報が嵩張らずに保存しておけるとこもあって人気を博している。

どれどれと、覗きこんだ新聞の一面の見出しに目眩がした。噴き出さなかったのが奇跡だ。

「あの奇女メイリー、勇者を一刀両断！」に、「勇者、魔王の次の敵はS伯爵次男！？」とか……紙だったら破り捨ててしまいたい。

（高いから折ったりはしないけどな、へへへ）

でかでかと映ったメイリーの写真には犯罪者のごとく黒い某線が一本目のところに入れられているだけなのに対し（むろんのこと勇者は顔だして綺麗に映っている）、俺の写真は顔の半分まで映っているものやピンボケだったりと無残なものばかりだ。

なんだ、この差。モブだからって扱いが酷いぞ。

「言っておくが、メイリーちゃんとの結婚の話はお前たちが生まれ

てくる前……そうあれは懐かしい軍学校時代に僕とドルーク（メイリー父の名前）で子供が生まれたら結婚させようねって約束から始まったのだよ」

うんうんと、一人で懐かしんでる親父、おつ。

「うんな話今の今まで一度も聞いたことないんですけど?」

「結局のところ、本人たちの意思が大事だと思った時期もあったわけよ」

「ほう」

あったわけってことはもう、ないわけだな。

「いつまでもお前が彼女とか作らないのが悪いんだよ、チャンスはあったのに」

つうーっと、一通の白い封筒が差し出される。

金の縁取りに、赤い蠟印。

「一言言っと、お父さんもドルークも先見の能力はない。ついでに言っと、僕たち子供の幸せを考える良い親なんだよ、基本」

冷や汗タラリ。だって、この封筒、あれですよ、あそこからくる呼び出しの封筒ですよ、ね?

「怨むなら勇者を恨むように、以上!」

王さまから呼び出しくらった。俺、死んだ。確実、生きてても人生オワタ。

03・王さまからの呼び出し

「メイリー・ジャミルを勇者に譲るか、勇者に諦めるように説得してくれんか？ できれば、後者だと余にとっても望ましい。勇者には姫と結婚し王家に入って貰いたいのだ」

解説。

王宮から発行された召喚状はなんと素敵なことに、開けると城の門まで転送される魔法付きなんです。

貰ったら、「即、来いや」という威しなんだね！ わあ、素敵！

そして、着いた途端筋肉隆々の人たちに連れられてガクブルしながら王さまの私室で待っていた俺。

まだ、死にたくない。まだ十八だもの。青春盛りだもの。恋愛だつてまともにできていないお年頃だもの。

親父はチャンスがあったって言ったけど、好きな子に告白する度に「メイリー」の名前が出てきて振られてたら恋愛なんてできるか！

「あの奇女メイリーといつも一緒にいる人よね？ ……あの、あた

しちよつと」とか、「ごめんなさい、メイリー・ジャミルを敵にまわしたくないの」と毎回目を逸らされた上、逃げられる俺に一体どのような彼女を作れと？

おっほん、それは今は置いておく。

さっきの思い出した悲しみに少し暴走しただけなので、ぜひ、忘れてほしい。いつか、素敵な出会いが俺にはあるはずなのだ。

えーっと、今の会話はやつとやって来た王さまに着席を促されてから、会話がスタートした第一声なわけである。

あれ、でもおかしくね？ おかしいよね。今この人変なこと言ったよね。

「あの、それって一体どういうことなのでしょう？」

超下手。マジで下手に出る。だって、俺ミスターオブ平凡なモブだもの。

ぶっちゃけ、王さまとか貴族というオプションがあっても会話とかないから！！

そんな俺だも率直に聞けないじゃない？ 「え、何それ。あんた勇者と自分の娘結婚させたいの？」なんて、絶対聞けないよね！

聞き違いにして、帰りたいなんて思っても口に出せないのと一緒に一緒！

（決して、俺がチキンなわけじゃない。侮辱罪で死刑になりたくないだけだもの）

「実はな、あれが出ていく時に約束したのだ」

あれって、勇者ですね。わかります。さすが、王様。勇者をあれ扱い。天変地異が起こったとしても絶対に、あれ扱いなんてしないよ。死ぬからね！ 死にたくないから！

「差し支えなければどのようなお約束が窺っても？」

「うむ」と、王さまは顎を摩る。

王さまはうちの親父とまったく違いスレンダーで引き締まった筋肉をしたロマンスグレーなオジサマ風の人物なので何にしても様になる。一つ一つの動作に気品が溢れてるって言うの？
人に面倒ごとを押し付けようとしても様になるね！

「無事魔王を倒して帰還したあかつきには、とある女性と結婚させてほしいと言われてな。基本的に我が国は自由恋愛を推奨しているが、一応貴族は貴族との結婚を推奨している」

「はい」

「勇者は平民の出であるからして、ここでさす“とある女性”とは高位の女性だと余は思ったわけだ」

まさかの、勇者平民！！ 態度その割にデカかったな！
でも、チートだからきつとなんか裏オプシヨンが付いているに違いない。こう、地方のとある血族とかそんな感じの。じゃなきゃ、不公平だ。

顔も良くて、強いだと、何の冗談だ。

いや、決して妬んでいるとか羨んでいるとかではない。ないから！

シヤド・スペクターはモブであることに誇りをもって生きています。安全地帯から外に出たくないとかそういうんでもないです。ええ、ほんと。

「もちろん、聞いたが奴は“その女性に自分は相応しくないからまだ言えない”としきり言うので、てつきり余は王女らの誰かがその“とある女性”だと思ったのだ」

「奇女で通っている女性だとは誰も予想できないと思います、陛下」

うん、その流れじゃ絶対、メイリーだとは絶対思わない。

大体、子爵、男爵なんて貴族でもペーパー（伯爵ぐらいからちよつとふんぞり返れる。なぜなら、領地持ちだから。次男には関係ないけど領地持ちだから！）で勇者の身分なら平民の出つて言っても子爵令嬢ぐらいになら求婚しても全然問題なかっただろう。

「実際、勇者は王女らと懇意であつたし、第一王子は勇者パーティーに属していたしな」

「王女さまたちは大変お美しく、自国の貴族のみならず他国の王族から求婚されるほどの方々ですから、当然です」

皆さま、大変お美しいです。

なので、メイリーや勇者に俺がうずもれてあんな写真が世の中に出回るようなモブな俺が傍に立ったら見えなくなるでしょうね！

「もちろん、メイリー・ジャミルに勇者との婚姻を強制することもできるが醜聞が悪い。それに、彼女は王立魔法研究所の名誉研究員だ。仕事を辞められても困る」

現在、メイリー頭の良さと天性の魔法センスを買われてこの王立魔法研究所の研究員をして働いている。貴族の令嬢なので別に働かなくてもいいので、ここら辺も奇女の由来の一つだと思われる。

ちなみに余談だが、俺はメイリーの助手だったりする。

俺の場合は、王立学院（国が建てた手習いとかする学校）卒業後、軍学校に行って騎士あたりを目指してもよかったが次男だし、モブだし、痛い嫌いなのでメイリーが「来る？」って口利きしてくれたのに全力で甘えた結果の助手であって特に何をするわけでもない。

あえて言うなら、メイリー係。

通訳とか面倒をみたりとかそんなことしかしてないけど、無職じゃないからいいの！！

「だから、そなたにはメイリー・ジャミルと結婚し、やんわりと勇者を諭しきっぱりと諦めさせてもらいたい」

ん？

聞いてない間に、会話がおかしなことに。

「協力してくれぬか？」

「結婚してですか？」

「ああ、婚約中なのだし問題ないだろう？」

（今朝、知ったんですけど……とは、言えない）

曖昧に笑ってから、ごまかす。

そうか、俺のメイリーとの結婚は周りからすると決定事項なのか、そうなのか。ふふふ、あはは、うひゃひゃ。悲しくて笑いが止まらない。

「頼んだぞ」と強く肩を叩かれたモブな俺。

どっちにしても、勇者を説得はしなくちゃいけないようだけど……。

これって、赤ちゃんが魔王に勝負挑むようなもんじゃね？

04・まさかの勇者と鉢合わせ

「急に消えたかと思えば……まさか、こんなところに居ようとは」

ててて、てっててーん。

事件です。大事件。

やばい、俺——勇者と鉢合わせしたっば。

召喚状の悪い所、呼び出しはしてくれても帰る時は自分の足で帰らないといけないところ。ついでだから、家にも帰してくれれば良いのに。って絶対皆思ってると思う。

そうか、「てめえにや、立派な足が付いてんだろ」ってことが、さすが王さま超上から目線過ぎる。

と、めんどくせえなと思いながら俺は家に帰ろうとしていたわけだ。

馬車って街のどこで借りれたかな、とか考えごととして歩いていた。同じ王都にあるけれど、貴族が住む場所は意外と遠い場所にあるのだ。一個一個広いから土地使っせいなんだけど。あー、エコじゃない。

でも、貴族なんて見栄っ張りな奴らだからしょうがない。

ドン。

「あ、すみません」

肩と肩がぶつかる。

相手の顔を見るために、下を向く。はい、皆さまわかりでしょう。

——相手、勇者でした。

以上、回想終了。

何のこのこ俺来てんだよ。

勇者居るよ、だって王さまのお気に入りだもの。お城に今勇者パー

ティー留まってるもの！！

「人違いです、ではさようなら」

頭を下げてダッシュで逃げる。

モブの特徴その一、逃げ足だけは速い。

モブの特徴その二、人ごみに紛れるとわからない。

しかし、逃げる前にガツと肩を掴まれたら終わりなのが俺らモブ。
ひい、怖い。痛い、痛い、力超強い。

モブな俺の腕ピンチ、ピンチ。折れる、折れる！！

「あの、手を離していただけませんか？しょうか？」

「お前だ！ その高い背、間違いない」

（まさかの背で気付かれた。顔で気づけよ、勇者！ もしかして、今朝からの攻撃もこの身長を基にしたのか、同じような背の奴に
もしてんじやないの、何コイツ！）

ぎちぎち。

力が益々籠ってるからね！ほんと、痛い、めっちゃ痛いからっ！
やめてー、折れるー、誰かーヘルプヘルプ！！

「このくらいの背の人間なんていくらでも居ます、よ。俺の友人も

同じくらいです、ええほんと」

同じくモブ仲間で親友のルックくんも同じくらい高いです。俺の方が若干高いけど。

「だったら、名を名乗れ！」

「ルックです。ルック・テイクです」

すまん、マイフレンド。お前の名前言っちゃった。

だって、心の中に浮かんでたんだよ。考えてたからしかたないんだけど。

あいつ赤毛だけど非常時だもの、許されるよね（全然関係ないけど、俺は一般的な栗毛だ）！？

だって、今だって腕の骨折られそうなのに俺超不利なんだもの。

王宮ってのは不審者が易々と攻撃などができないように王族や宮廷魔術師と言った一部の人間しか魔術が使えないようになってる。同様に武器も騎士など許可されないと持ちこむことができない。

（奴は武器も持っていて、魔法も使い放題。ほら、俺赤ちゃんと同レベル！！）

「……そうか、悪かったな。ルック・テイク」

ほつ。やっと、手が解放されたぜ。

さあ、墓穴を掘る前に帰ろう。すぐ帰ろう、今帰ろう！

知合いとか出てきたら困るからお家に帰ろう！！

「それじゃ、今度こそ失礼します」

頭を下げて、別れる。

角を曲がった瞬間、ダッシュ。

「あー、怖かった」

王宮から出て、一息吐く。

いやー、知合いに合わなくて良かったあ。

ほら、一応次男だけど貴族だから。顔知ってる人が城に居るわけですよ。

もしかしたら、モブな俺の顔なんて皆わかんなくて、髪と身長で判断してる可能性が今日の勇者のせいで非常に濃厚になったけれども。

皆、マジで身長と髪の毛の色で判断してないよね？

「家に帰ったらもう、どこも行きたくないわ」

明日は有休使いたい。

今度ルックに会ったら「ごめんね」って飯でも奢ろう。そうしよう。

数十分後、真実を知った勇者の雄たけびが城下に響き渡ったとか、

渡らないとか。

俺は聞いてないから、知らない。
聞こえた気がするけど気のせい。きっと、気付かなかったんじゃないかな。

王さまや筋肉隆々なお兄さんたちが口滑らせてない限り。

口が軽い男ってやーね。

04・まさかの勇者と鉢合わせ（後書き）

あれ、ヒロインが01以降出てない。次回はメイリーちゃんが出るよ！

05・俺の日常

「遅い」

誰のお言葉でしょう？

正解、他称婚約者のメイリー・ジャミル。

有休取れなかった。

事実上の上司であるメイリーに電子コールしたら、駄目だって言われた。

前々から言っても自分と同じ日じゃない限り休ませてくれないんだからいつものことって言ったらそれまでなんですけど、うん、休み欲しかった。もう、家から出たくなかった。

勇者と次鉢合わせしたら今度こそ殺されてしまうに違いない。ガタブル。

余談、電子コールというのは魔法で声を電波化して特定の相手に伝

言を送りつけるといふ素敵な方法です。ただし、条件があつて相手の顔と名前が正確にわかつていないと駄目だというね。

ほら、無駄に電子コール飛んできたら怖いじゃない？ そういう配慮が魔法に籠つてるようだよ。

詳しい方程式知らないからわかんないけど、解読できる人ならそういう条件となくせるらしいけど（メイリーはやろうとしたらできると思われ）、俺にはちんぷんかんぷん。だって、モブだもの。

そっぴや、なんか昔から俺へ電子コールがメイリーや家族、親しいモブ仲間からしか来ないのって前回からの話、俺の顔がわからないということのような気がしてならない。

更に余談、着信拒否は相手の顔や名前がわからなくても簡単にできる（声に含まれるキーワードとかで遮断可能）。俺は昨日から勇者関係の電子コールはキーワードで無視中。

特に勇者はチートだからわかんなくても絶対送りつけてきていると思われるので、顔と名前拒否。調べたらハイラント・ヴァリエントって言うらしい。ちゃんと読んだら昨日の新聞に書いてあった。

「遅くない、遅くない。時計見てみ」

「八時二分だ。ほら、二分遅い」

「部屋に来るまでに二分かかったただけだっつの」

やれやれと、ため息交じりに部屋の中に入る。プンプンと怒ったままのメイリーを鏡台の前に座らせる。

「ほら、飴でも食べなさい。怒るのは糖分が足らんのだよ」

ポケットから非常食の飴を出す。

「そう言う時は、カルシウムだ。しかし、カルシウムが不足しないと精神不安定になりやすくなるが、医学的根拠はない」

「朝から御講義ありがとうございます」

そう言いつつも飴を貰うメイリーを、心の中だけで少し笑う。

こいつのこう言うところは可愛い。もっとこういうところを前面に出せば男にモテるだろうに、あ、いや、勇者にモテてるからいいのか。振ったけど。

意外と知らんところでモテてるのかもな、顔は綺麗だしな。ファンぐらいはいそくだ。

「イチゴ味が、悪くない」

「はいはい、喋らない。化粧が上手くできないだろ」

俺の朝は、メイリーの迎えから始まる。

朝八時に到着後、着替えだけすませている彼女に化粧を施し、髪の毛を結ってやる。

以前は、自分でやっていたのだが、めんどくさいらしい。特に化粧が。

だが、しかしこんなに綺麗な顔なのである。化粧せんでどうする。勿体ない！ と、一度化粧と髪の毛を結ってやったら毎朝の俺の仕事になった。

抗議したが、もちろんさっきのように色々とまくし立てられて撃沈したのは言うまでもない。

「よし、出来た。ふ、毎度ながら完璧だぜ。なんか最近俺、職にあぶれたら髪結いとかになれる気がする」

モブの特徴その三、手先は無駄に器用。

変な所で人より秀でるのがモブ！！

「……一生、助手してろ」

「ぎゃん、酷い！」

なんて、奴だ。俺が髪結いになれるわけないと、最初から否定するなんて。しくしく。

良いんだ、どうせ、モブだもの。

「はいはい、所詮素人ですよ。ほら、左向け、左ー」

角度を変えさせて、確かめる。

今日の気分はまず両サイドに三つ編みを作り、それを後ろに持っていきバレッタで留める簡単なものだ。全体は緩く流すのがポイントである。

昨日勇者に告白された時は、後ろでお団子でした。ついでに言うと小さな白薔薇のコサージュ付き。

メイリーの髪は羨ましいことに金髪で猫っ毛だ。ちょっと結いにくけれどサラサラで、羨ましい。

俺なんて伸ばしたら変なところではねるので短く切りそろえている。普通の髪型以外するなという啓示に違いない！！ 髪の毛すらモブな俺！！

「シャド……昨日、城に呼ばれたみたいだけど何の呼び出しだったの？」

うおー、こいつがなぜ昨日別れてからの俺の行動を知っているのだ！

「ほら、そりゃ、勇者様のことに決まってるじゃん！ いやー。初めて間近で陛下見たわ、ありえんくらいイケメンだった。若い頃はモテたに違いない。あれは、女を泣かせる顔だね」

結婚のことと言われたが、それは黙っとく。

昨日一晩考えたことだが、あの馬鹿両親ズをなんとか説得しないといけないと思っている。

俺と結婚するとか言ってるけどこいつは口下手なんだぞ。もし、他に好きな人がいたら可哀想じゃないか。皆、奇女って呼ばれるからってメイリーは女の子なんだぞ。

勇者がわかってるかどうかは知らんが、もっと馬鹿両親ズはこいつのことを考えるべきだ。

今後に運命の出会いとか待ってたらどうするんだ、まったく。

「わたしと勇者を結婚させるとでも言われた？」

ちよつと考える。

諦められるように説得しろとは言われたが、王女のことと言ってもいいのかわからないし、モブはいらんことは言わないものだ。

「いいや、逆。諦めさせるように説得しろってさ、お前に仕事辞められたら困るってさ。よかったな、さすが名誉研究員！」

綺麗に整えたばかりなので頭を撫でくりまわすようなことはせず、ぽんぽんと軽く叩く。

「大丈夫だ、俺なりにいいようにすつからな」

「別にシャドは頑張らなくて良い」

「がーん」

ふふふ、だが、モブは打たれ強いんだぜ！ 雑草根性！

「大丈夫だ、まかせろ！」

メイリーのため息になんか負けないぜ。

「準備もできたことだし行くか」

「……シャドの馬鹿」

「何、え、いきなり、馬鹿？ それはカルシウムの件のことか！？」

またまた、溜め息を吐かれた。なんでだ？

05・俺の日常（後書き）

メイリーの「……一生、助手してる」は、「一生傍に居てね」の意味。
味。そんなの絶対、わからんしw

06 パパラッチの待ち伏せにあう（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

06・パパラッチの待ち伏せにあう

「メイリー・ジャミル子爵令嬢ですよね!!」

おうつつまほうけんきゅうじょに、ぱぱらっちがあらわれた!!

メイリーの研究室に行く通路の柱から女が飛び出す!!

ぬおおい！ お、驚かせるなよ、心臓が悪かったらどうする！ 心停止で天国行きだぞ！ 勇者かと思ってびっくりした。まだ死にたくない、死にたくない。

どうやら、俺たちが来るのを待ち伏せしていたようである。

モブな俺など相手にしないとわかってるのでメイリーを後ろに隠す。なんと、モブは壁にもなれるのさ！

（この先立ち入り禁止だから、ここで張ってたのか……あー、ヤダねえ、朝から）

相手は、顔の半分以上が覆われるようなドデカイ眼鏡を掛けた女である。年齢は変わりなくらいだが、背はメイリーや俺に比べるとかなり低い。鼻の周りには雀斑が浮いていて、短く切られた金茶色の癖っ毛は無造作に見えるものの綺麗に整えられている。

眼鏡とつたら意外と可愛いとかいうフラグ持ちに違いない。かもしれないが、生憎好みではないんだよ！

モブな俺の好み。

一、行動力があるのが何より微妙。無駄な行動力はモブにはいらん！

二、俺の好みはもっと素朴な感じの同じモブ女子である！！

ぜひ、もっと勉強してから出なおしてきていただきたい。

「勇者のことを振ったって話題になってますけど、もう勇者に見込みはないんですか！？」

こっちが無視しているにも関わらず眼鏡っ子はメイリーに絡むので、更に俺は知れつと邪魔をする。

（しかし、メイリーの機嫌悪くなるなあ、こりゃ）

予測。たぶん、メイリーの家の周りには研究泥棒避けの魔法が幾重にも張ってあるので近寄れなかったのだろう、うちの家にはちなみにパパラッチは居なかった。

一応、伯爵だからね、簡単にそういうのしちゃいけないのさ。ははは、階級世界ってやつだ、俺次男だけど。

でなくても、あそこら辺には個々で結界張ってあるところ多いし、近寄れなかった気もするけどね。

その点で言うとこの研究所も張られてるのだが——一体誰にどのようにして許可を取ったのか（もしかしたら知合いに口利きして貰ったのかも知れないが）首には一般客用のフリーパスが掛けられている。

「邪魔だ、退け」

「そんな少しくらいいいじゃないですか、ね。勇者様のこと聞かせてくださいよ！」

「三度は言わない、退け」

メイリーは苛立たしげに見下ろす。

その眼光があまりにも鋭かったので女は短く「ひっ」と悲鳴を上げて、矛先をこちらへ向く。

「じゃあ、代わりに貴方のお話聞かせてください！！ 婚約者のスペクター伯爵子息ですよネ！？ 勇者よりも自分を選んでもらえて今の感想はどうですか？」

代わりってなんでしょうね、俺モブですけど、代わりはないよね。

「残念だけど、メイリーのことはジャミル子爵に、俺のことはスペクター伯爵にそう言うのは許可を貰ってね、じゃあーね」

背中からメイリーを出して、「さあ、行きましょう」と背を押す。これ以上機嫌が悪くなれると、後々苦勞するのは他でもない俺なのである。モブは氣苦勞が多いので、なるべく減らしたいのだよ。平穩に生きたいのだよ！

地味なモブ人生なんて素敵なんざんしょー。

「そんな、待つて！」

服の端を掴んで、女が俺をひきとめる。おーい、意外と高いのよ。普通のシャツだけど絹なんで。

「本当に少しでいいんです、お話聞かせてください！ー！」

「だから、聞きたいなら許可取ってって言うてるでしょうに」

せつかく人が優しく言っただけなのに、女は退かない。モブだけれど貴族なんだけれど、俺。仕方ない電子コールで警備員呼ぶか。

メイリーが暴れて悪評とか付いたら嫌だし。

「いい加減にしないと、警備員呼んでここからつまみださせるよ？」

「あたし、これが初取材なんです、お願いですからっ！ー！」

（聞き分けがないな）

やっぱり呼ぼうと、脳内に相手を思い浮かべる、が。

「いい加減にしろ、シャドから離れろ」

待てなかったようである。

腹の底から出るような低い声が、女を諫める。

「気にしなくていいって、ね。ほら、君も放して、放して」

女から服の端を外させる。

「スマイル、スマイル」

軽くメイリーの肩を叩いて、警戒を解かせる。

パシャ。

カメラのシャッター音。

なんですかね、仲の良い二人の図？ 捏造で、勇者のことで喧嘩する二人の図？

どっちにしても、この女ってば本当に空気読めない。もし、気にするなって自分に言われたとも思ってるなら神経図太いと思うんだ

けどな。

モブはあんまり自分から色々しないものなんだけど……正当防衛は誰でもするもんってことで。

「へつくし、いやん、俺つてば風邪の引き始め？」

カメラの真ん中に小さな氷柱が刺さる。

あら、誰がやったのかしら？

俺、え、知らない。モブだもの。魔力そんなに持ってないんだけれども？

記憶がないよ。こほん、こほん。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ
あああ」

「おやおや、どうしてそんなところに氷柱が？」

髭ないけど、親父をマネして髭をくるりん。

眼鏡の奥の眼光が、キツと睨む。茶色の瞳には怒りが滲んでいる。
こう言うのってなんて言うんだっけか。先にそっちがやったわけだし、責任転嫁？

大体、俺何にも知らない。咳しかしてない、してない。

「このこと記事に書きます！」

「何のことかわからないけど、許可が下りたら書くといいんじゃない？ ほら、警備員も来たようだし帰れば？」

二人、警備がこちらに向かって走って来る。この女の悲鳴を聞きつけたようだ。

「如何しました!？」

「この人たち私のカメラを……」

「んー、別に俺たちは何もしてないよ。それより、この子、許可誰に取ったのかしらないんだけど勝手に写真を撮った上にしつこく付き纏ってきたからひんむいて持ち物全部取り上げてから、摘まみ出してくれない？」

ニコニコ笑う。へへへ、モブは平穩を乱す奴が嫌いなんだぜ！

「あ、持ち物は全部メイリー・ジャミル宛てに届けてくれると嬉しいな」

「何、勝手な……」

「かしこまりました」

次男だけど伯爵子息なモブ、つまり俺。加えて、メイリーはこの研究所の名誉研究員。

パスを首にかけてるだけの身元不明な眼鏡っ子と俺たちのどっちに警備員が味方するかなんて一目瞭然！

「シャド、行こう」

「はいはい。それじゃあ、よろしくね」

手を引っ張られてながら歩く。

女が何か言う声が聞こえた気もするが、俺の耳は都合のいいことしか聞こえないの。ほら、モブだから。

パタンと、研究室の扉が閉まる。

メイリーの眉間には深い皺が刻まれている。ひえ、これは俺に八つ当たりするフラグか！？

「どうした、どうした、ほれ、スマイル。笑え、な？」

皺を指で押さえる。

「ちゃんと、一人でも追い払える」

手をはたき落とされる。地味に、痛い。

「え、俺何にもしてないよ。なんか、氷柱は勝手に生えたっばいよ！」

眉八の字だと、モブな俺と違って綺麗なお顔がメイリーちゃん台無しよー？

「わたしのせいでシャドに嫌な思いさせた……ごめん」

「してない、してない」

けど、勇者を説得させるの真面目にやらないとだな。

作戦思いつくまで逃げようと思ったけど、パパラッチという敵が居たのは思わぬ盲点だった。あんな風に待ち伏せされるとか全然考えてなかった。

今回は女だったからいいけど、男とかだったらモブは非力なので勝てません！メイリー連れて、ダッシュで逃げるよ！格好悪いとか、何それ、格好良いと美味しいの？

生憎、モブには関係ない常識だよ！

「まかせろって、言っただろ！ つつても泥船ぐらいにしかなれんけど」

沈む確率高いですが、それでよければ乗船お待ちしております！！

「泥船じゃ、最後沈むじゃないか」

メイリーが呆れるみたいにしてんだけど、笑ったので泥船乗船つてこ
とで。

06 パパランチの待ち伏せにあう（後書き）

鈍感だけどメイリーのことぐらい守ろうとするのがモブなシャド。
女の子の心を知らず知らずに驚掴みするけど、フラグは自分で折るか、メイリーに折られるので恋愛に発展しない！！

07 デートの約束入りました（前書き）

お気に入り三ヶタ突入しました、ありがとうございます。

07 デートの約束入りました

「シャド・スペクターああこのヤロウ！！ てめえ、マジ殺す！！」

「あうちーい、耳があ……」

キーンってした。うるせえっての！

さきほどくしゃみの際に勝手に消費された魔力が回復したので電子コールを聞いてみたら、物騒なメッセージが入って俺、びっくり。ついでに、うるさくてもう一個びっくり。

相手は昨日俺が名前を使ったルック・テイク。もしかして、勇者に絡まれでもしたのかな？ やっぱり、基本皆俺のこと身長で判断してんのかな！？

「どうした？」

おっと、あまりにルックの声が大きくてメイリーに聞こえたようだ。

「ちょっとルックからね。それより、ほら、お仕事。お仕事」

電子コールは基本、耳元で囁くように聞こえる。電子コールを飛ばす時は、声に出すのが一般的。魔力が高いと声を出さなくても良いし、脳内でのやりとりも可能だ。

モブな俺は耳で聞き、口に言葉を出すけど何か問題でも！？

「ふーん」

む、なんか不満そうな返事だな。

なんですか、本を読んで給料を貰う俺を批難ですかっ！ 言っとくけど、仕事全力で応援してるからっ（応援はタダですが何か？）！

えー、簡単な魔法なら無詠唱で使える俺がチートになれない理由――魔力が少ない。

あまりの魔力のなさに拍手しながらさすがモブと褒めたいほどで、なんと平均以下である（代わりに、回復は早い、結局のところ蓄積量が少ないからっただけでしかない）。

この世界の生物は基本的に母胎で成長する間に、魔力の貯蔵するための魔臓と呼ばれる器官が体の中に作られる。尚、この魔臓は場所、数ともに決まっておらず、遺伝というわけでもない。

ぶっちゃけ、運だ。

魔臓の平均数は二つから、三つ。
体の中に大体五つ以上持つと宮廷魔術師になれる。あのチートな勇者は七つもあるそうです。はい、化物。

メイリーはちなみに、五つだ。

もちろん、宮廷魔術師に誘われたらしいけど、研究所の仕事を選んだらしい。

君に、拍手！　ありがとう！　おかげで、俺は無職じゃないです！！

おほん、ここで魔法と魔術の違いも説明しておく。

簡単に言うとも魔法ってのは、体内にある魔力を使ってテキストに何かすること。

逆に魔術は、方程式とかなんかややこしいことを考えた上で使うことだ。電子コールも魔術の類。

ようするに、魔術師ってのは自分で魔力の使い方を考える頭が良い奴ってわけ。

で、魔力ですが使えば蓄積されている分を使うわけで当然、消費される。そして、個人差で回復。

悲しいことに一つしか魔臓を持たないモブな俺は簡単な魔法を使うとすぐ消費してしまうわけですが、小さな容れ物なのですぐに回復もできるわけです。

多ければ多いほど回復に時間がかかるそうだが、勇者はチートなのできつとそんなにかからないんじゃないかな！　ずっりの！！

さておき。

この研究所は日常生活に使える魔術だったり、魔石（自然が年月を掛けて作った魔力の結晶体、すっごい石って覚えてね！）を加工してデータ新聞のような魔具を作るわけだ。

金持ちなモブは使っただけ、イエー！

さてさて、そろそろ怖いのでルックに電子コール飛ばそうか。あいつ、一応軍の人間だし、俺勝てない自信あるよ！ 満々だ！！

「メイリー、俺ちよつとルックに電子コール飛ばしてくるから、大人しくここに居ろな」

「ここじゃ駄目なの？」

「まー、男同士の話を聞くななんてレディがすることじゃないわ、ノンノン」

睨まれた。すみません、馬鹿なこと言っ

けど、「とにかく、お前は出んなよー」と気にせず外に出る。謝ってもここじゃ喋らないのさ。

到着しました。眼鏡っ子を追い払った立ち入り禁止の場所です。人が飛び出してくる気配はない、よし、大丈夫だな。勇者居ないな！！

いや、あつちでも別にいいんだけど、メイリーが心配するようなことが話題に出たら問題だからな。

お、なんか、俺ってば紳士じゃね？ イケメンじゃね？ 違うか。

「やー、どうも、どうも我が親友ルックくん。メッセージ聞いたけど、どったの？」

以上、送信。

電子コールですが、悲しいことに魔力がある人間ほど早くメッセージが送受信できる。つまりは、俺は届いてもなかなか受信できない！

（お、回復したばかりなんで届くのが早いな）

何がどったのだ！ よくも、人の名前使いやがってオレを殺す気かっ！ 勇者に追いかけられたじゃねえか、ボロボロだ！ 土下座しろ、謝れ！！

「いや、だって勇者マジ怖かったんだって、仕方ないじゃん？ ほら、ご飯誇るって、許せー」

君を労って高級料理だって払っちゃうよ、モブだけど、豪勢に今日ぐらい行こうぜ！！

レッカーに夕方六時だ、遅刻したら死ぬと思え……

酒場でのデートの約束入りました。

（奴め、高い酒を飲む気だな……）

女の子とのが良いんだけどな、モブっ子なら大歓迎なんだけどな！

「へいへい、了解つと」

ふー、電子コールに使う魔力が少ないとは言え連続して、三回も送ると大分消費されるぜ。

「そうだ、丁度良いから所長のところに行つて当分こっちに俺たちが出ないって言つてこよつと」

事前に危機回避はモブの基本なので、この研究所には当分近寄らないことにする（研究所に來ないで自宅に籠る研究員も多いし、別に問題はない。ここにいつも來てたのは設備が良いつてだけだし）。

パパラッチが簡単に入れるようなところは事が落ち着くまで近寄らない方がいい。

メイリーが居る奥の部屋は嚴重に結界が張つてあるので安全だけど、また、こういう場所に張り込みされると対応できないからな。

非力なモブは悲しいぜ。

神さま、「所長が当分こっちには出て來ない方がいい」つて言つたつて嘘をつくことを許してちょ。

07 デートの約束入りました（後書き）

シャドは基本、過保護。次回、モブ友のルックくんが登場です！！

08・親友なら苦楽を共に

「ちょ、おま、何それっ！　ぎゃあはははははははははは、はあっ！！　プツ、ううう、腹が、腹が……あーはははは！！　笑い死ぬ、死ぬっ！」

「こういう時は気にしないのが優しさだろうに！　友達がいのないやつめ！」

むっさい男のオアシス、レッカーに到着したけれども……笑ってるね。むかつくことルックは大笑いだ。勇者にもう一回ボロボロにされてしまえばいいのに！！

だが、こちらを見ているのは奴だけではない。周りの他の奴らも見ている。

……。

わかってるよ！　え、モブの顔のどこに注目要素があるんだよって、ツッコミを入れたいんだろ！？　おうおう、教えてやんよ、頼だよ！　手形がバッチリついてんだよ！　例の嘘を送り届けた時に言ったらこうだよ！

俺が何をしたというんだ！

回想。

そう、あれは、ジャミル家の玄関前でのことでした。

俺はいつものようにメイリーを送り届けたのです。今日は友人であるルックとの用事があったので、時間は少しかり早かったでしょうか……。

もちろん、モブですから、俺には下心などと言うものはなかったのです。いつだって、全力でモブです。な、なのに！！いきなりメイリーが、きゃーっ！ あーれー、おたすけー！

……ウソデス。

これじゃ、叩かれないですね、ええ、実際はこうでした。

「いいか、安全だとは思うがパパラッチ等には気を付けるんだぞ。顔も化粧落とさないと大変なことになるからな」

「わかった。また、明日」

「おん？」

別れ際、そう言われたのですかさず例の嘘を吐く。もちろん、追求されて嘘くさくならないように別れ際をあえて選んだ。

言っておくが、言い忘れとかじゃないからっ！ 所長に言っで満足とかじゃないからっ！

「おーおー、そうだ、そうだ、言い忘れてたわ」

言ってるだけで言い忘れてたわけじゃないからっ！ 会話の流れ、流れ！

「今日パパラッチ居ただろ？ ああいうのが今後増えたら困るってんで、所長が当分研究所来んなってさ。つーわけで、俺はこっちは来ないからーって、眉間皺、皺っ！」

給料ドロボーな上に、仕事放棄な俺を批難するための皺ですか？ 勇者と戦って来ようかなという俺ですよ、給料以上のことしようとしてますよ！！

「化粧と髪は？」

「じ、自分で？」

「自分で？」

ニラ見あい。じゃなかった、睨み合い開始。じいー。

明日も、こいつが勇者にボコボコにされますように！ 眼鏡パパラ
ツチとかに追われて逃げまどいますように！

「しゃーねえな、笑ったことだし、治してやるよ」

ルツクの手が俺の顔の前に差し出される。

淡い光が顔の前に生み出され、ジンジンと痛んでいた頬は熱を失っていく。

「いやー、あまりの優しさにシャド、恋しちゃいそう、うふ」

目を輝かせて言ってみる。瞼、ぱちぱち。

「死ぬ。さーて、何飲むかなー。あ、おねーさん、とりあえず、料理上からここまで持ってきてくれる？」

「ちょ、え、どんだけ食うの？」

お酒飲むんだと思って、高いの飲める感じでしかお金持ってきてないよ、俺！

「満漢全席な勢いで？」

（しばらく極貧生活決定……）

「おいおい、嘘つけよ、金持ってたんだろ？」とか思つかもだけど、伯爵の次男ですから、俺！

金を持つてるのは親父とお城務めの長男だけよ。給料ドロボーはその給料でしか生活してないんだよ！

メイリーの給料と比べたらすすめが、ちゅんちゅんしてる給料だから！

俺、慎ましく生きるモブの鏡みたいな男だから！

「けつどよお、なんで勇者はメイリー嬢なんかに求婚すんだろなー。普通に考えて、うんな、冒険しねえだろ。おねーさん、それから、これと。あと、これも！！ ついでに、ビールジョッキで」

「はあいー」

ムチプリな看板娘のお姉さんが返事をする。

本当に、お前全部、食うんだろうな。嫌がらせのために、一口ずつとか言ったら怒るぞ、俺。

「綺麗だし、頭良いし。給料良いし、子爵令嬢だし、奇女だが優良物件には違いないだろ！ おねえさーん、俺水ちょうだい。水」

「はい、これご注文の料理のここから、ここまで分ですう。お水はちよおっと待ってねん」

揺れる胸、立派なヒップ。看板娘も悪くないですね。

モブじゃないですが、なんというか、ムチプリは無敵なのですよ。

「肉旨そうー」

キンキンと、ナイフとフォークがぶつかる（マナー違反なので、良い子はマネしないでね！）。

「オイシソウデスネ」

机の上のこの肉！ もう料理って言うか、肉！ 肉、肉、肉、魚、肉、肉、野菜、肉。どんだけ、肉食だお前。

ええい、自棄だ、俺も食う！！

グサ。

グサ。

ん？

「お前はいいだろうが、オレならごめんだね。もっと普通の可愛い子でいいわ。その点勇者とか選り放題だったのに、理解できないぁーい、これはオレのだぁ、楽しみにしてたんだからあああな」

ぎちぎち。なんてことだ、同じステーキにフォークが！

「俺も理解できないが、してきたもんはしてきたんだよ。って、俺のが先にフォークさしました！！ 大体、肉なら他にもあるだろううつがつつ！」

ぎちぎちぎい。

「傷も治してやったし、今日は俺の慰労の会だろうがつ、ゆ、ず、

れ！」

「友達だろ、苦勞は共に分け合おうじゃないか！ 勇者も半分こ、肉は半分にしないけどもおう」

「断固、拒否、断る！ オレとお前ちつとも似てねえのに、昔から間違われすぎなんだよ！ 肉はオレ、勇者はお前！」

確かに、赤毛だし。ルックは背は高いが筋肉質だ。

俺はどっちかっていうとひよろいモヤシだし、後ろから見ても間違えようがないのだがやたらと間違われるのはルックにもオーラというのが足りないせいに違いない。

「じゃあ、肉譲るから、勇者も貰ってくれよ」

「ははは、冗談、冗談」

「へへへ、本気、本気」

笑いながら、二人同時に無駄に引き延ばされたステーキを一端、皿の上に戻す。

最初と同じく旨そうな感じは変わらないためか、互いのフォークが抜ける気配はない。

「正々堂々と拳で決めようぜ？」

「それはルックに有利すぎるわあ。じゃんけんにしようじゃないか」

「見つけたわよおお、シャド・スペクター!!」

カシャっていう音に俺は後ろを振り返る。

「見つけたぞ、シャド・スペクター!!」

ゴゴゴっていう音にルックが前を振り向く。

前方には勇者、後方には眼鏡っ子。

(なんで、こいつらがここに!!)

二人の矛先は明らかに俺たちに向いている。

「シャドくん、頑張つて!」

「待て、お前がシャドだろうがっ!!」

逃げるなら俄然後ろですが、まだ料理一口も食べてないのでここを動きたくないって言う。

09・食事中は静かにしましょう（前書き）

お気に入りが1000件突破いたしました。ありがとうございます！

09・食事中は静かにしましょう

「きゃー、あちらに勇者さまが居らっしゃるわぁあ？（裏声）」

勇者の方へ視線が行くよう仕向ける。

モブの特徴その四、男女関係なく所詮モブ。

裏声の理由は、今話題の人だもの「あそこに居るわ」と誰かモブ女子が言えば（正確にはモブ男だけでも）、勇者ファンの人たちが——特に恋する乙女な方々が我先にと群がるって肉壁になってくれるのだ。

皆さま、ご協力ありがとうございます！

「きゃー、本物の勇者様よ！！ あの、サインください！！！」

「わたしも欲しいい」

「いえ、私はあの男に、用事が……」

どんどん集まる肉壁と言う名の一般大衆。

勇者にもイメージというものがあることなどお見通しなのだよ！

敵は無碍に扱えても、ファン、特に女子にそんなことできんだろう、ふふふ、羨ましいから、豆腐の角で頭ぶつける、勇者！！

「えげつねえな」

「なんのことかさっぱりぽん！　これで巻き込まれないし、いいじゃないかぁ！」

眼鏡っ子パラッチもモブなんかよりもネタになる向こうに行っている。影が薄い俺らモブなんて、一瞬で忘れられる流れ星にしかすぎないのさ、きらーん。

「良いじゃん、良いじゃん。敵前逃亡が格好悪いとか俺はまったく思わないよ。そういうのは暑苦しい別のところでやるべきなのさ！　すみませーん、注文の品ちょっと全品テイクアウトお願いします」

ムチプリお姉さんも向こうに行っているの、別の店員さんに声を掛ける。

「うちちょっとそう言うのは……」

「味落ちても構わないから、お願いしますよー。今後とも御贔屓にしますし」

男の店員は机の上の皿の量を確認してから「少しお待ちを」とどこかへ駆けて行く。

……もう、思ってる方居ると思うので言わせてもらいます。「戦うんじゃねえのかよ!!」と、ツッコミたいんだろ、知ってる？ 世の中には不可抗力というものがあってだね、するする詐欺というものもあるわけなのだ。

メイリーのためには思ってますが、うん、説得とかしたいよ。パパラツチとか追い払いたいよ！

けど、両方きたらモブの許容範囲を超えるのさ！ ルックに「シャドくん」とか言って押し付けようとかしないからっ！

「酒も買って、ルックン家で飲み直しませんかね？」

「お前いたら面倒ごとに巻き込まれる気がしてたまらえね……」

「ままま、そう言わず。お肉あげるからさ、はいあーん」

先ほどのステーキを差し出す。

「いるか、ボケ」

拒否されたのでむしゃり。食われたら食われたで気持ち悪いから全く平気。つか、食べたら全世界の俺がドン引き。

勇者がこちらに向かって何か言っているけど、モブの耳には届かない。

それに、俺に言っているのか、横のルックに言っているのか。定かでない。

「双子だったのかっ！」とか、うんなことを勇者様が言っているわ

けがないので聞き間違いに違いない。

あー、肉うます。

店員が持つて来た料理を全部ルックに持たせて俺たちは店を出る（金は俺の財布から支払い済みである）。非力なモブなので荷物は持てません。持ちません。貴族さまは要所要所でフオーク以上の重さの荷物を持てなくなるのである（モブも共通）。

去る背中に「逃げるな！」って声がかかったので仕方なしに振り向く。

「勇者さまー、メイリー・ジャミルはやめた方がいいんじゃないかなー？ きつとお姫さまとかのが似合いだよー」

一般大衆の声に混ざって言う。

すると、周りも「そうだ、そうだ」と賛同。

賛同した人、君は俺と同じく素敵モブに違いない！！ モブな仲間たちよ、ありがとーう！！

はい、場所を変えまして第二回モブ男によるモブのための飲み会を開催いたします！！

場所、ルックの借りている安下宿。

かつて白かったであろう壁は所々に罅があり、天井にはクモが「ここは、あたいん家だよ！」と主張している。

「相変わらず、汚い……」

貴族なので、貴族なので！ 心からポロつと出た素直な感想じゃない、貴族ゆえの発言！！

一般の家も汚いに違いない。酒場以上の汚さだが、同じモブ仲間の家がこんなに汚いのはルックのせいじゃなく、平民のせいなのだ。違いない。

「うつせえな、寝るとこと足場がありやいいだろ、部屋なんて」

心の中だけで、女に縁がない（自分のことは棚上げ、棚上げ）のだなとこっそり涙する。ああ、軍学校の服をそんな風に投げちゃ駄目だろ。いやー、酒の瓶を足で片付けないで！

どうか、家庭的ないい人がこのムサイ男と縁がありますように！！

「なあ、さっき聞き忘れたことが聞きてえんだけど」

どこに置いてあったのか（埋もれてたのだと思われる）折り畳み式の上に料理を並べると、ルックはベッドに腰を掛け酒を飲み出す。

なんだ、俺は絶賛お前のために神さまに祈っている最中だぞ、さつき勇者と眼鏡つ子が現れたぐらいなんだから効くかもしれないだろ。全部、お前のためだぞ？

「聞きたいこと？ お前と俺が双子に間違えられた件ならあれは聞

き間違いだ。こんな不衛生な生活のお前と俺がそっくりなんて断固断る！！」

親指と人差し指で荷物を俺は片付け、ハンカチの上に腰を下ろす。

なんか、この部屋で見ると食べ物がちつともうまそうじゃない件についてちよつと本気で誰かと語りあいたいんだが？

「こっちの台詞だつつの！　じゃなくて、確認、確認。やっぱ、お前メイリー嬢と結婚すんだなって、思つて」

「するわけないだろ、何言つてんの？　寝ぼけてんの？」

馬鹿両親ズは勇者を説得後、説得予定だ！

「いや、しろよ、結婚」

「はい???」

こいつ頭、おかしいだろ。前々からおかしかったけど。

「新聞見た時はメイリー嬢の苦し紛れの詭弁かと思つただけどさ、姫様勧めるぐらいだし、勇者にそれって渡したくないってことだろ？　いい機会だし、もう結婚しちゃえよ」

「いや、まったく違うから！　王さまに、勇者説得して姫さまと出来ればくつつけるって言われてるから！！　結婚の話も昨日の朝メイリーの口から聞いたから！！　馬鹿両親ズの妄想から出た話だから！！！！」

息継ぎもないほど、早口で喋る。

メイリーと俺が結婚など言うことはないのである、勇者が俺なくらいありえない話だ。

「けど、結婚しても正直問題ないだろ。どんだけ、自分の生活がメイリー嬢で埋め尽くされてるのか考えてみるよ」

朝、迎え（化粧、髪込）。

昼、一緒に仕事（給料ドロボー込）。

夜、送る（下心抜）。

……夫っていうよりどっちかって言うと、召使的な？

「召使的な生活がカカア天下をさすならば、全世界の働く男は召使いだ」

「はーあ、お前本当に鈍くて救いがねえよ」

「失礼な、走るのだけは得だ！」

ん？ 目線が果てしなく冷たいのはなぜだ？

「ええい、もう、なんだよ！ 気分悪いからもう、帰りますーう、探さないでくださいー。あんたとあたしの関係は終わりよ、よよよよー」

「おいっ！」

「メイリーは親が決めた相手じゃなくて、メイリーが幸せになれる人物と結婚するんですっ！ ほっというて頂戴！」

泣きながら部屋を出る（噓泣き）。

まったく、いつも、こいつもなんだってんだ！！ モブな俺がメイリーと結婚？ 意味不明なことは言わないでいただきたい。

メイリーにはメイリーが好きな人と幸せになっていただくのだ！

声を掛けても止まることのなかった背中にルックはため息を出す。

「好かれてる自覚ねえのかよ」

髪を掻き篸る。

メイリー・ジャミル。

外観こそ美しいが、感情がないのかと言うほど冷めた目と動くことのない表情筋に大抵の男は近寄ることすら敬遠する。

彼女の顔に何か表情を浮かべられたとして、嫌悪。それ以外を浮かべることなどできない。

唯一の例外が、シャド・スペクターだ。

何が理由でそうなったのかは知らないが狂気とも言えるほどメイリ
ーはシャドのことを慕っている。

証拠に、シャドに近寄る女をメイリーは赦さない。排除するのにも
眉ひとつあげずに行える。

彼女の感情がないような奇行が奇女としての所以だ。

しかし、メイリーのそれに比べるとシャドは一線をひいている。あ
んなにも尽くし、もやは生活の一部としているにも関わらず恋愛感
情を持つとしない。

「好きには違いねえのに……めんどくさいやつ」

くっ付けば全てが丸く行くと言うのに、何をあんなにも拒むのかル
ックには理解できなかった。

友人は、ただ勇者の登場が吉兆であることを願うばかりだった。

09・食事中は静かにしましょう(後書き)

タイトルちょっと変えました。

10・太陽を思ふ向日葵（side：メイリー）

「そんなに俺に会いたいのに、えー、仕方ないな」

自室に入るなり、髪の毛の飾りを乱暴にほどく。

（思い切りシャドの頬を叩いてしまった）

ほどいた後に、シャドが買ってきてくれたバレッタだったと気付いて顔をしかめる。壊れていないか一通り確認してから、鏡台の上の小箱に丁重に戻す。

「会いたくないわけがないのに……」

化粧のことは一応頭に浮かんだが、気にせずベッドの上に寝転ぶ。服に皺が付いたら魔法でプレスすれば良い話だし、化粧は寝なければいいのだ。

仰向きになって、手のひらを見つめる。
手は赤みもなく、痛みもほとんどない。反して、頬の熱は覚めるところか熱くなっていく気がする。

「馬鹿」

叩いたのは凶星をさされたというのもあるが、怒りの方が先行したといつてもいい。所長を理由に「会いたくない」と言われた気がしたのだ。

（シャドの馬鹿、馬鹿、大馬鹿！）

体を反転して、ぼふつと枕に顔を埋める。

（やっぱり、本当は迷惑なのかもしれない……）

勇者からの求婚をされたものの、自身としてはまったく理由が思い当たらない。

言い訳がましく聞こえるかもしれないが、記憶にある限りあの場で初めて会ったし、勇者だということも後で知ったのだ。

（気持ちを疑われた？）

もしかして、自分に他に好きな人が居ると疑われたのだとしたら居ても立ってもいられない。

（あの勇者と結婚するだなんて考えただけでも吐き気がする）

せっかく、父親とスペクター伯爵を説得して婚約者の座を与えて貰ったと言っのに。これでは、他の女を排除した意味がない。

メイリー・ジャミルにとってシャド・スペクターは特別だ。太陽の様な存在と言っても過言ではない。

それは、七つの時に訪れた。

スペクター家のパーティに呼ばれた時のことだった。

「よう、不細工」

言ったのはシャドではなく、彼の兄であるシュロムだ。

メイリーは生まれた時から、上手く表情がつかれなかった。大きくなればそれなくなるだろうと両親他周りは思っていたが、七歳になってもやはり彼女はそのままだった。

幸い大人たちはそれを気遣ってくれたが、子供は違う。

そんなメイリーを好奇心の的としてからかつては、遊んでいた。特に、シュロムは中でも筆頭と呼べただろう。

三つも年上のくせに、何かにつけては意地悪をしてくるのだ。

「返して」

髪を留めていたリボンのうちの一つを奪われたせいで、左の髪がなだれ落ちる。

最近では彼が十歳になり王立学院に通い出したので会うことも少なくなっていたと、安心し油断していた。ここは彼の家なのだから居て当然なのだ。

「やだね」

べつと出された舌に、怒りがこみ上げる。しかし、眉間に皺がでる以外表情が現れることはない。悔しくて堪らないのに、その気持ちが相手に伝わらないことこそがメイリーにとっては苦痛だった。

「返してやれよ、大人げねえの」

こんな時にいつも現れて助けてくれるのはシャドだった。

いつまでもリボンを返す気配のないシュロムに対し、シャドは自分の首に巻かれていたワインレッド色のリボンで手際よくメイリーの髪を元に近い形に戻す。

「これでとりあえず、我慢な。色似てるから少しの間くらいきつと大丈夫！」

「駄目、あれ」

「えー」

シュロムが持っているリボンを指差す。

シャドは助けてはくれるが問題を解決してはくれなかった。別の形ですませて、終わらせてしまふ。昔はそういうシャドの微妙な優しさあまり好きではなかった。

我儘な話だが、助けてくれるならちゃんと助けて欲しかったのだ。

「だって、返してあげれば？」

「フン、誰がお前の言われた通りになんかするかっ！！ 弟のくせにいつもいつも生意気なんだよ！」

走ってシュロムはどこかへ行ってしまう。

「あーらら、行っちゃった。というわけだ、諦めなさい」

「駄目」

ギョツとシャドの服を握ると少しの沈黙後、「仕方ない」と言う言葉が降ってきてメイリーは少し安心した。こんな我儘を言って、他の子たちと同じように手を振り払われるかもしれないと言ってから気付いたのだ。

別にあのリボンでないと本当に駄目なわけでもなかった。

「泣きそうな顔はなし、スマイル！ 大丈夫、たぶん、なんとかするから！」

へらっと笑った口元から覗く、白い歯が眩しかった。

頬を持ち上げられて無理やり笑顔の形に顔を作られて気分が悪いはずなのに、今ならちゃんと笑えるんじゃないかなんて思えた自分が居たのだ。

驚いて、胸が鼓動した。

決定的に彼に堕ちたのはこの後、シュロムのセットした罫で怪我しつつもリボンを彼が取り返してくれた時だ。

「ごめん、リボン焦がした……」

十歳になるまで子供は魔力制御装置リミッタを付けることが義務付けられている。操作方法を知らない魔力で怪我をしないように十歳まで使えないようにされているのだ。

学校に通える子は学校で、通えない子は町などに住む修道士などから使い方を教えてもらい段々とその制御装置を能力に見合ったものに変えていく。

その点、王立学院に通いだしたシュロムは魔力の使い方を知っていたし、制御装置も使用制限が緩かった。

考えれば、「返さない」と明言されたりリボンが木の上に結ばれたのを見た時点で何らかの罠だと気づけばよかったのだ。

「我儘言っでごめん、なさい」

木から落ちたシャドはいつもみたいに笑ってなかった。

背中も打って痛いはずで、手も火の魔法のせいで軽い火傷をしているのだから当たり前だった。

（シャド怪我した、どうしよう）

反省しているし、悪いと思っているのに、涙は流れない。

同い年の子はよく泣いているのを見る。自分もメイリーは泣くべきだとわかっていた。わかっているのに、涙は出なかった。

「俺の方こそごめんな、なんとかするつもりだったのに」

優しい手は髪を撫でる。

中途半端な優しさはいつも重たいのに、今は胸に充ちた。

「リボンはいい。シャド怪我痛い？」

「怪我？　おー、怪我な。怪我は男の勲章なんだぞ、本に書いてあった」

あの鼓動がもう一度聞こえた。

「うん」

「へへへ。あ、そうだ！　今からシュロムに仕返し行くぞ！　頭にリボンを接着剤で留めてやるんだ。なんたって、リボン人から奪うくらい好きなんだからな！」

本当にリボンを接着剤で留めてシャドの方が怒られていたが、怒られている最中にもシャドはメイリーに笑ってくれた。ただの兄弟喧嘩だとも言ってくれた。

嬉しさ。戸惑い。鼓動はもう止まない。

耳を澄ませば、トクントクンと彼を思っで鳴り響く。

いつもいつも自分を助けてくれるヒーローはシャドだった。その人を置いて、他の誰かを愛するなどできるはずもない。

それが、いつからかおかしくなったのはいつからだろう。

助けてくれるのに、優しいのに薄い被膜みたいなものが二人の間にあるのだ。

気がつくとなんかがあって、優しい眼差しは他の女たちにも向けられるようになった。

（他の誰かを好きになるなんて駄目。シャドはわたしの）

朝見た眼鏡の女が浮かぶ。

「邪魔……」

起きあがって、鏡台へ向かう。

「地味なら好きになる？」

シャドが目を向ける女たちは一貫して地味だ。髪も黒や茶色ばかりでパツとしない。

手で二つの円を作り、眼元へやる。

（眼鏡かけたら……地味？）

優しい眼差しは自分だけの物になるだろうか。もう一度、自分だけ

のものになるだろうか。

それより、今は――。

「明日、ちゃんとシャドが来ますように」

神に祈る。

優しい彼が来ないわけがないけれど、自分は被膜の外なのだ。安心はできない。

眩しい笑顔の貴方は太陽、見つめる私は向日葵。

10・太陽を思ふ向日葵（side：メイリー）（後書き）

ここでシャドの兄登場！ 兄貴はツンデレで「好きな子ほどいいめ
たい」だったのに、弟に奪われたとかいう設定とかあればいいと思
う。子供の頃の刷り込みとか萌えるw

11・別名は本の虫

「いいところに来たのう、シャド坊」

「どども。いい本、入ってます？」

ルックの部屋を飛び出してやって来たのは行きつけの本屋。しかも、新書じゃなくて古本屋。この独特な臭いがモブには堪らないですよ（決して、変な臭いフェチなんかじゃない）。

わけわからんことを言われた時は本を読むに限るってことで来たわけです。本を読んで集中して、あんな変なことを言われた事実なんてきれいさっぱり忘れちゃうのだ！

何を隠そう、実は俺にもメイリーのようにあだ名があるのだよ！

ちゃーん、その名も『本の虫』！

学生時代は学校他、近くの図書館の本を読み漁ったもんさ！

むろん、今でも暇があれば本を読むので現在進行形で本の虫でござい。弱そうなあだ名ですが、モブだからいいの。モブに強そうなあだ名はいらん（付いてたらモブじゃない）。

さて、この店の店主ですが、丸眼鏡の老人でラッヘンさんという。年老いてもふさふさな髪はやや後退しつつもオールバックができるほどで、かなり羨ましい。将来は俺もあなりたいものだ。

「丁度、お前さんの好きなハボン・メモリアの本が入ったところじゃ」

「ハボン・メモリア!？」

乙女のようにきゅーっと心の中で悲鳴を上げる。なんだと、俺のお気に入りの作家じゃないか!!

え、何、運命の出会い？ 俺のために神さまが準備してくれたご褒美？

「なんてタイトル、なんてタイトル!？」

カウンターから身を乗り出して、ラッセルさんに尋ねる。早く教えてくださいよ!! もったいぶるなんて、酷いですよ!! ささ、どうぞ、どうぞ!

「そう慌てるでないわ、えっと、……ふんふん、シラサギの城じゃな」

テンションアゲアゲ!!

聞いたことないタイトル！ 俺、その本持ってない！！

「買う、買う！ いくら！？」

「百ギニーかのう」

「百っ！」

くそ、ぼりやがって！！

一冊の本の定価は高くても、印刷技術が発達した今じゃ五十ギニーがいいところだ。

たしかに、ハボンの作品はそれ以前のもので手書きだったり、印刷してあるものでも相当古いが……。

財布の中を慌てて覗く——あー、今日ルツクなんかのために使わなければ、結局あのステーキしか食べられなかったし、帰り道では酒瓶も買わされたし！！

あいつに、今日だけで百五十ギニー近く使わせられた俺に、百ギニーだと！！

「あの、八十くらいに値下げを……」

「次男坊とは言え、伯爵家の人間がケチケチするもんじゃあない。人間性を疑われるぞ」

ここで、まさかの貴族属性がアダとなった！！

（くそう……）

「ひよひよひよ」っという笑い声にもう一度財布の中を覗く。どう見ても、百ギニーぴったり。

今月の残りあと十日。給料日まで考えるとあと十五日。他になんも買えないし、できない。家に帰るのも徒歩になる。だが、欲しい。

（家に帰ったら一応へそくりとかはあるが……）

モブの特徴その五、モブ貯金を持っている。

説明しよう！ モブ貯金とは、いつ不運フラグの被害に合うかわからないので貯めたへそくりのことだ！

「ほれ、さつさとせんか。明日には店に出すぞ」

「買った！！」

「まいど！」

あ、言わされた。

道端の噴水にどっしりと腰を下ろし、本を開く。
家に帰るまで待てません、なぜなら虫なので。こつ言つのは貴族で

も賤がいき届かなかったんですね、残念！

（なにに、今回はニンジャだと！）

俺がハボン・メモリアを好きな理由、独特な世界観。

ニホンと言う国でサムライだったりなんたりが戦ったりするのだ。
初めてこんなことを思いついた人だ、胸がときめかないわけがない。

（ふんふん、なるほど、なるほど。フリーで働くニンジャが縁あつて出会った姫のために奮闘するのかつ！）

実を言うと、モブだ、チートだという言葉もこの人の本から学んだ。

全ては、著者のあとがきに書いてあったことだ。

モブとは、ヒーローや、ヒロイン。サブキャラクターでもなんでもないものをさすのだ、と（ようは、名前もない一般大衆ってことだな）。チートとは、人間業ではないことができる卑怯な存在をさすらしい。

無論、俺にはシャド・スペクターという名前があるが、世界でみたら俺なんて貴族Bとか、街民Dとかにしかねない背景のような、空気のような存在であつて、絶対に特別になんてなれないので、モブなのだ。

メイリーのように魔法の才能があるわけでも、頭が良いわけでもない。

勇者のように魔王を倒すなんてそれこそ無理難題つてもんだ。

……。

二人ともチート寄りすぎて涙が出るわ！！

補足させていただきますと、あのシュロムにすら劣るんですよ？

地位も能力も、あいつどっちかって言うとかチートよりで正直むかつく。毎回毎回会う度に弟に嫌味しか言わない兄貴ってどんなもんよ！

もう少し、俺に優しくしてくれればいいのに！ きいー！！

あれか、昔頭に接着剤付きのリボンを留めてハゲにしたことまだ根に持っているのか！ 大人げないな、水に流せよ！

それか、ハゲになってしばらくいろんな人に笑われたことを根に持っているのか！

シュロムったら、小さい男ね。やーね、そんなつまらないことをいつまでも愚痴愚痴と言うなんて、ぶんぶんしちゃうわ！

ついでに、ほんと、ルックは馬鹿なんじゃないだろうか！ 下手しなくてもルック以下ですが、何か！？

に、も、関わらず俺が結婚だと？ 大体、どこをどうとったらそうなるのだ！

説明求む！

（絶対に、メイリーには名も知らぬ人の良さそうなイケメンくんが

似合つてのに！)

結婚式では、俺はメイリーの花嫁衣装を見ながらおいおいと泣きだし「こんな子ですがよろしく願います」とドルークさんと為を張るくらいうつとうしく花婿に絡む予定だ。

花束を投げられたら、きゃーきゃー言ってる乙女の傍に行き肩とかぶつかって「大丈夫ですか？」って心配するとかする運命的なフラグを手に入れる予定なのだ！

「……ほんと馬鹿だろ、俺が結婚するわけがないって」

気分がそがれたので本を閉じる。

お家に帰って読みましょう、驕のいき届いたボンボンなもの。

歩いて帰らないとだもの。

早めにこの湧いて出た結婚話は、白紙に戻してしまわなければならない。

こんな話はあつては駄目なのだ。

モブはつつましく、応援して良いところを見るのだ！

勇者を説得し、馬鹿両親ズも説得し、素敵な出会いをメイリーにあげるのだ！ それでこそ、モブ！ モブな俺の仕事なのだ！！

（絶対、メイリーに素敵な旦那さまを見つけてあげるのだ、ふふふのふー！）

モブは夢を見ないし、現実世界にしか生きない。

なぜなら、モブだから。

モブの世界はキラキラと煌めいても輝いてもいないのだ。人を輝かせるためにあるのだ！！

11・別名は本の虫（後書き）

ハボン・メモリアは転生キャラ。死んでるのでまったく、物語には関わりませんが！ あ、1ギニーは200円なので、本は2万円くらいつてことで。

12・実兄が敵だった件について

「剣をとれ」

実の兄に剣を向けられながら俺はあさつての方向を見る。

（一体、モブな俺がこいつと喧嘩するようなフラグはどこで立ったのだろうか）

一時間半以上をかけて歩いて御帰宅した俺の足は、棒みたいにパンパンだった。

ご飯食べて、風呂に入って今日はオールナイトな気分で本読むぜーって思ってたのに、それが玄関を開けて「ただいまー」って言うたら「剣をとれ」って何これ？ 新手のいじめ？ 何なんなの？

金髪碧眼だからって、同じ両親から生まれたのに顔立ちがはっきりしてるからって調子に乗らないでいただきたい！！ グリーン最高！ 栗毛万歳！ 一般大衆でモブな俺ひゃっほい！

ただし、思っても喧嘩になるから言わないけどね。モブだから、

心の中だけで叫ぶよ！

「第二騎士団の副団長さまと剣を交える趣味は俺にはないんですよー」

階段の踊り場で立ってるシュロムに近づき、ロングソードの先っぽを指で沈める。

ここに出されたのがサーベルとかだったら「チャンバラごっこでもしたいの？」って、思うところですが（それでもやらないけど）、ロングソードってあれですよ、本気で殺^やる時のあれですよ。

全力でお断りだからね！ 自分の部屋で静かに本読むんだもの！！

ごほん、ごほん。我がお兄様のシュロムくんはなんと軍学校に通いきつちりと三年過程を終了後、騎士団に入り貴族のボンボンたちをばったばったとなぎ倒し、現在では二十一歳のくせに副団長とかやっているんですね。普段は、城に近い場所に家を借りてるんですよ。自腹だろうけど、それって、収入良い証拠だからっ！

あー、本当に嫌ですね、厭味ですね。チート撲滅運動誰かしてくれないかな。はい？ 俺はしないよ、モブだもの。

「いいから、剣をとれ！ メイリーと結婚だと！ 許さん！！ お前より、勇者！ 勇者より、私のほうがよっぽど良いじゃないかつ！」

「きゃー、弱いものいじめ反対!」

問答無用とばかりに振り回される剣を紙一重で避ける。ふははははー、避けるのだけは得意なのさ!

「ちょっとシユロム、何、態々難癖を付けに来たの? あと、自分がメイリーに似合うとかそういう寝言はやめるといいよ!」

「寝言じゃない!」

うつわー、寝言じゃないんだって。この人も頭の螺子吹っ飛んだ?メイリーから長年いじめてたせいで、嫌われてるの自覚ないとか重症すぎるんですけども。

「寝言じゃないなら、こつちこそ許しません! ドルークさんと一緒に断固阻止します! いじめするような子にはあげません!」

避ける一方では、後ろの扉にやがて追い込まれてしまうので、傘立てから傘を取り出す。「剣をとれ」とか言うなら、剣を先にこちらに渡して貰いたいものだ。

モブは喧嘩をふっ掛けたりしても売らないのということを、平穩世界を生きる生き物なのでそういう物騒なものは持たないということをぜひ理解していただきたい!

「いじめてない!」

「はい、ダウト! 自分のしたことが思い出せないなら、ドルークさんのメイリー子育て奮闘日記を読め! 事細かにお前の悪事が記載されてるわ!」

メイリー子育て奮闘日記とは、ドルークさんがメイリーが生まれた日から現在に至るまでの成長日記が毎日どこで見てるんだってくらい事細かに書いてあるストーキング成長日記である。

一度、ジャミル家でかくれんぼをしていた際にあれを見た時の俺の衝撃つたらない！　こんな物が世の中にあるのかっていう恐怖に、お前も墮とされてしまえ！！

○月×日

うちのメイリーがあまりにも可愛すぎて、今日も死にそうである。しかし、うちの娘があまりにも可愛すぎるのかプレゼントのところの上のジャリが泥団子を投げてきた。下の方が助けていたので今回は許そうと思う。堂々とは仕返しできないのが辛い。ち、爵位め。シャドくんが爵位を継ぐことになったら今までの仕返しを思いつきりしようと思う。

今回の仕返しとして、二人が投げ返していた泥団子にこっそり石を入れて置いた。急所に当たらなかったのが、やや不満。

ぬわあああんで、書いてあるこんな日記を読んだ時の俺の気持ちはどうしてくれる！

石が入ってたのを後から知らされた時の恐怖つたらないわ！　六歳の秋に重すぎる秘密を共有してしまったわ！

帰り際、「うちの子これからよろしくね」って笑顔で言われた時読んだのがばれたのかどうなのかと三日間涙が止まらんかったわ！

あとで、あの発言が「メイリーを守る会の会員入会のお知らせ」だ

と知った時はもう、いろいろと何かが吹っ切れたわ（今じゃ名誉会員らしいよ）――

「意味のわからないことをぬかすなっ！」

「ぬおっ！」

傘で剣を弾いたら、ざっくり切れたですけど、ひいひいっ！ あぶないよー、怖いよー。

「昨日、聞かされたこっちの身にもなれ！」

持っても意味がないので、傘の柄を投げる。

おー、本気でやばくなってきた、後ろがもう二メートルぐらいしかないんですけども。

「こら、馬鹿息子ども玄関先で何してる！」

「はいはい！ 帰って来たらシュロムが剣を持って突っかって来ました！ 俺は本しか持ってません！」

「シャド、お前！」

（嘘は付いてないもの、事実百パーセントなもの。傘投げたけど）

剣の攻防が止んだので、地味に距離をとる。

シュロムはバツが悪そうに目線を彷徨わせている。へへへ、いい気味だ。

「あーあ、母さんの傘をこんなにして、帰ってきた時に見つかった時は自分たちで言い訳しなさいよ」

「だって、さ。シュロム」

「な、お前がそれを持ったんだろうが！」

「切ったのは自分じゃないの」

我が家の母親様（我が家で最強は彼女である。逆らったら死亡フラグが立つのだ）は現在、メイリー母であるシレーナさんと執事を連れて美容の旅に出ている。世界で一番怖い存在である。勇者よりもガタブル度が上である。上記で説明したような日記を書くドレークさんをねじ伏せてシレーナさんと旅行に出る人物に関わってはいけないのだ。

傘の件は、よって無関係を貫く方針だ。

「それで、なんでこう言うことになったのか説明してごらん」

「私はメイリーがこんな取り柄もない愚図と一緒にいるなど断固として反対する人間の一人として、堂々と決闘を挑んだだけです」

堂々？ 堂々って「とれ」って言うておきながら、一人だけ剣を振りまわすことですか？

「メイリーちゃんのこととはドレークと僕が決めたことで、お前に関係ないことじゃないか」

「関係なくないです！ 私が駄目でなぜ、これなら良いのか理由を聞かせてください！」

何これ、めんどくさい。

シユロムってメイリーのこと嫌いじゃないの？ あれなの、自分のお嫁さんより弟のお嫁さんが綺麗とか許せないの？ どんだけ心狭いのよ、君。

「はいはい、そんなに政略結婚がお望みならお見合い写真をプレゼントしてあげます」

「父様、私はそういうことを言ってるんじゃないありません！」

本当になんだ、こいつ。

「あのさー、親父居るからこの際ハッキリ言うけど別に俺、メイリーと結婚する気ないから」

良い機会だ、親から説得しよう。

メイリーにはぜひ、人の良さそうなイケメンさんと結婚して貰いたいと言う俺の意思を聞いて貰おう。

「ふざけるなよ、こつちが、こんなに……、人を馬鹿にするのもいい加減にしろっ！」

「は？」

わけがわからない。

背中が玄関の扉にぶつかっていて、顔が痛い。口の中には血の味がある。

「痛っ」

触れた頬には確かな痛み——俺、殴られた。

勇者といい、ルックといい。お前といい、どいつもこいつも本当に何だよ！

「愚図がつー！」

「わー」っと何かを叫びながらシュロムは家の外に飛び出していく。俺はこのままか、ふざけんな。

「なんだあれ、意味わからないんだけど」

「鈍感」

「ど、鈍感？」

ルックには鈍いって言われて、父親には鈍感って。

「僕は治さないよ、その痛みお前はもう少し味わったほうがよさそうだ」

「あっそ」

ケツの埃を叩いて、叩かれた拍子に落とした本を拾う。

「言っとくけど、訂正しないから。俺はメイリーとは結婚しない」

「理由は？」

「俺じゃ駄目だから」

俺はモブでそういうのはしない。

「却下」

「……却下されても、俺は明日、メイリーン家に行ってドルークさんにも言っから」

「もっと却下」

イラッ。

「言っつたら言っから!」

ザー。

「シャド、お前人の気持ちも少し考えなさい」

体に冷たい水滴が滴る。魔法で頭から水を掛けられたようだ。

「考えてないのはどっちだよ！……って、あああああああああ
ああっ、俺の百ギニーの本がっ！　まだ読んでないのに！　アイロ
ン！　いや、ドライヤー！！」

親父は保留。

本が水浸しだ、早急に乾かさなくては！！　くう、こう言う時魔法
が思いっきり使えないのは辛いぜ！！

「話はまだ……」

「話より本！　ああ、文字がっ！」

声を無視して、自室に向かう。読んでないのに、本を駄目にされて
たまるかっ！　どうか、乾いてね、ハニー！！

息子の相変わらずの本の虫つぶりに、スペクター伯爵は酷い頭痛が
した。

あの様子では、シャドはシュロムに殴られた頬の傷のことさえも忘
れているだろう。

（せっかく大事な話をしてたのに……。好きなことの前ではどんな話も意味がないところがうちの奥さんそっくり）

普段は影の薄い息子に久々に、血の遺伝を感じた。

そうは言っても、今は昔よりも意識的に影を薄くしているような気もするが。

「強情なところ本当にリーフそっくりで嫌になるなあ」

玄関に置いてある呼び鈴を鳴らす。

「旦那様、ご用でしょうか？」

すぐに現れた初老のメイドに用を申しつける。

「シャドが頼に怪我しているから、魔法は使わず薬だけ出しなさい」

「かしこまりました」

老女は足早に消える。

（シュロムにも言い聞かせないとだし、いっそ、リーフが帰って来て二人に言い聞かせてくれれば楽なのに）

ガツンと一発、二人に言い聞かせてくれるに違いないのに、想う人物は生憎と不在だ。

「いつもこういつめんどくさい時は居ないんだから……」

その場に居ない妻を想う。

12・実兄が敵だった件について（後書き）

シャドが無駄なところで今回は男を見せました。が、兄貴の心进行きり勘違い。そして、嫁さんズ名前だけ登場！

13・星が霞む夜（side：シュロム）

「あのさー、親父居るからこの際ハッキリ言うけど別に俺、メイリーと結婚する気ないから」

「あの馬鹿、くそっ！」

ギリリと唇を噛み締める。

（なんで、いつもああなんだっ！ 大体、この期に及んで結婚しないだっ！）

殺気を静めることのできない状態では馬に乗ることすら叶わぬので、シュロムは馬小屋の方ではなく家の周りをひたすらうろついていた。

愚図、腑抜け、意気地なし。どれだけ心の中で皮肉ろつとも気は収まらない。

「こうなったのも母様のせいだ。ちきしょう、おれの方が早く好きになったのに……」

目元を乱暴に服で擦ってから、すんと軽く鼻を吸る。

シュロム・スペクターの恋は、伝える前に相手から嫌われるという最悪の形で幕を無理矢理落とされた。

相手に気がないのに想い続けるなんて、諦めが悪いと人は思うかもしれない。彼とて、幕が落ちた時に諦めようと思った。自分がしたことを思えば、認めざるをえないと。

事実、諦められただろう——焦がれた相手の想い人が、実の弟だったと知らなければ。

シャドとメイリーは同じ年だ。生まれた日が少しばかりシャドの方が早いだけで、ずっと一緒に育って来た。入る余地など最初からなかったのかもしれない。

それでも確かに一度は父プレゼントから、「いつかお前らのどちらかと結婚するかもしれない」と言われ、シュロムはそれが自分であって欲しいと願っていた。

初めてメイリーを見た日をおぼるげながらも覚えているのだ。ゆりかごのなかで眠る子供は人形のように愛らしく、美しかった、

と。

——完全に、一目惚れだった。

成長するにつれ、メイリーはどんどん可愛くなっていく。目に入れても痛くないと断言できるほどシュロムはメイリーを幼少期愛でいた。

転機は八歳の時、母親のあの一言だったに違いない。

今考えれば滑稽である。貴族と言っても他国の、それも戦闘民族として生きて来た母親の言葉を信じたのがまず間違いだったのだ。

「母様、なんでメイリーとシャドはいつも一緒なの？」

ラズベリーパイを淑女とは程遠い彼女は、手掴みで食べながらこう言った。

「あん？　なんでって、そりゃ仲良しだからに決まってんじゃなか」

「おれもメイリーと仲良くなりたい！」

過去に戻るならば、あの日の自分を消し去りたい気持ちでいっぱい。なぜ、十二歳で彼女が普通と違うと言うことに気が付いたのだろう。五年も経って気付くなら、一生気付かなかった方がよっぽどましだった。

「仲良か……あれだ、構えばいいんだよ。うん」

「かまう？」

「おー、母様はな、父様をいつも追いかけてまわして手に入れたぞ」
腕を組み、うんうんと頷く。自信満々だった。そんな姿に、疑えと言う方が無理というものだ。

「追いかけてまわすと好きになって貰えるのか？」

「なるなる。他にもいろいろしたけどなんか最後は根負けしたって
言ってたわ、あの人」

「わかった！」

どこの世界の女が泥団子投げたり、髪の毛引つ張る男に恋するのか
説明して欲しい。

十二歳の時、「前々から思ってたけど、お前って貴族にしてはフラ
ンクだよな」と友人に言われ、初めて自分が如何に言葉遣いが悪く、
喧嘩っ早いいじめっ子の鏡のような子供なのかを理解した。

そこからは必死で一人称を「おれ」から「私」に直し、言葉遣いも
改めた。もちろん、メイリーに優しくしたが既に目が合えば顔を
しかめられる関係がそこにはあった。

（なぜ、根負けしたのだ父様よ……）

淑女のような母親ならば、こんな結果にならなかっただろうとシュロムは思う。シレーナのように「おほほ」と笑うような人ならばきつと善き答えをくれたであろう。

重たく息を吐きながら空を見上げる。

（いつもひよこみたいに付いて来て貰えて何が不満だと言うんだ、あいつめ）

無表情だが、むしろ、それが可愛いと思えるのがメイリーの魅力だと思っている。

もしも自分が後ろから付いて来て貰えたならば、他の男に告白などさせる隙など与えなかったと断言できる。

（勝手に壁を作って何様だ）

いつだってシャドは自身が物事を中心だったとしても、数歩離れたところから全体を見ている。まるで、自分が関係ないかのような振る舞いが気に入らない。

「ああもつ、メイリーもなんだってあんなのがいいんだ、信じられない！」

憤然として、声に出す。

（殴られて何もしなかったら今度こそ、真っ二つにしてやる……）

物事には何事も理由が必要だ。諦めるのも、始めるのも。

「大体これだけしたら兄の気持ちを察して、メイリーを幸せにするくらい言えるだろうに、本当に愚図だな。我が弟ながら信じられん」

芝生の上に大の字に寝転がる。

（人がせつかく負けて諦めようと……まあ、途中から本気で殺りそうだったが……）

「兄というものはいつだって辛いんだぞ、愚図め……」

（あれが欲しい、これが欲しいと言ってはいけないのは年長者の務めであり、下の馬鹿は馬鹿みたいに笑っていればいいのだ。愚図のくせに、無駄に考えるから話がややこしくなるのだ）

見上げた空、暗闇の中で煌めく星。

「なんだか、ここはよく星が見えるな……」

借りている家では街の明りが眩しすぎて、あまり見えない気がする。そんなにもここは離れていないはずなのに。

シュロム。シュロム、今どこだい？

電子コールに気付いたものの、どうせ見てないのだからと寝たまま返答をする。

「すぐその庭ですよ、庭」

そうか。……メイリーちゃんのことはお前にも内密で悪かったが（馬鹿にしないでくれ、こうなることぐらい……好きな子の気持ちくらい知ってるさ）

彼女がシャドを見るようにして、自分も見てきたのだから。

「父様、謝るなら母様と結婚したことについて謝罪してください。彼女こそが私の人生の汚点であり、諸悪の根源です」

返答は返ってこない。

「一応、おれは兄貴ですよ、いつまでもあの愚図みたいに子供じゃない。諦めることぐらいできます」

できれば諦めたくなかったというのは事実だけど、こればかりは仕方がない。

結局、好きな女が笑ってるに越したことはないのだ。自分の隣でなくとも、幸せならと思うのが大人の男だ。

「父親なんですから騙されなくてください。全部、芝居ですよ。理由なんて今更聞きたくもありません」

なんだか大人になったね、シュロム

「ええ、父様が母様にぶくぶく太らせられている間になりました」

また、返答がないことに笑い、声もなく涙だけ零す。

「ちゃんと根回ししてあの馬鹿を逃げられないようにしてくださいよ」

ああ、わかったよ

頷きに、会話を終わらせる。

人はいつか、大人になるものだ。痛みも苦みもいろいろなものを背負って。

「本当に星が綺麗だ……」

手を伸ばしても届かないその眩さが、痛かった。

13・星が霞む夜（side：シユロム）（後書き）

お兄ちゃんがあまりにも可哀そうなので救済。勇者は容赦なくフルボッコ予定は変わらないけど。シャド本当にヘタレだな、これ見ると。メイリーちゃん、頑張って！

14・モブの生きる世界

『……、君には……しました。……、かるうじて……可能……』

聞きたくない言葉が頭の中でリフレインされる。
やめろ、やめてくれ。わかってる、わかってるからっ！

「やめろっ！」

自分の声で俺は目覚め、慌てて時計を確認する。

「に、時十五分。まだ、こんな時間かよ……」

時計を元の場所に戻して、寝具に倒れこむ。

（朝がこない）

さっきから、眠っても一時間と時間が経たないうちに目が覚める。
ぐっしょりと濡れた服と寝具が身体に張り付いて気持ち悪いが、着

替える気力はわかない。

あまりの寝苦しさに寝返りを打とうとして、頬の痛みに気付く。

「……痛っっ……」

そういえば、顔をシュロムに殴られたんだっただ。

（一昨日から最悪だ。大体、モブにどいつもこいつも期待しすぎなんだよ……）

布団で眠るのをやめて、這いずるように部屋の隅に移動する。そこで、膝を抱え小さくなる。

「俺に何ができるっていうんだよ」

勇者に追いかけては殺されかけるし、王さまも人任せ。パパラツチは待ち伏せしてるし、訳も分からずビンタされ。原因があるからと必要以上にたかられた上、せっかく買った本は水浸し（紙はぐしゃぐしゃだが、なんとか読める程度には直した）。あげく殴られ、説教。

なんだ、神さま、人の気持ちのわからないモブは、「お前なんぞ夢に魘されて、一生寝るな」ってか？ ふざけんな。皆、するなと言ったりしろと言ったり。キャパシティは限界を越えました！ 全員同じ意見で言ってください、モブな俺には対応できんわっ！

（俺はしがないモブなのさ）

メイリーとも結婚しないし、人の善意に甘えて生きていくのだ。こ

れぞ、モブの醍醐味！！

「なんて、ね」

少し視線を上げて、右の中指を見る。

実はここには透過の魔法を掛けられた指輪があつて、ちょっと解除の呪文スベルを唱えればあつという間に現れる仕組みになっている。

こんなものを周りは俺が嵌めているなんて知らない。知らせないようにしている。秘密の指輪なのだ。

「明けぬ闇に、光させ」

現れた指輪の作りは簡素なもので、シルバーの台座の上に小さな魔石が三つ付いている。小さな赤い魔石が一つと更に小さな黄色いのが二つ。

傍から見ればなんでもない指輪だが、俺にとっては特別な意味を持つ指輪だ。

（はい、あつという間に魔力切れ）

指輪は数秒もしないうちにまた透過して姿を消す。

台座の内側に透過の魔法が書かれており、この黄色の魔石の方がその魔法を支えているのだ。赤い魔石の方は魔力制御。所謂、魔力制御装置に使用される魔石だ。

そう、これは魔力制御装置なのだ。

今消えたのは俺の魔力が尽きたせいだ。そして、この指輪があるからこそ俺は一定時間に三回の魔法が使えるくらいの魔力しか使用できない。

制御装置をしてるなんておかしく思えるかもしれない。事実、大人になると皆魔力制御装置なんてしなくなる、魔力の使い方を知っているからそんなことをする必要がなくなるのだ。

けれど、それは普通の人たちの話だ。

一つ言うと、俺だって初めからモブだって思ってたわけじゃない。自分を特別だと信じてた、子供の頃は。あの日が来るまでは信じていたんだ。

自分が特別だと。

今じゃ笑ってしまうが、そう、子供は大人がどんなに色眼鏡で見ても、そんなのはちつとも関係なくて自分はなんでもできる存在なんだって思っているし、夢で世界が煌めいているのだ。

皆、初めは知らない。

大人になるにつれていろんな柵が、体を、俺と言う存在を縛るなんて知らないんだ——特別だったはずなのに特別じゃない大人になって、本当に特別な子だけ特別な大人になるなんてあの頃、俺は知らなかったんだ。

モブなんて物語の中だけの存在だと、居たとしてもそれが自分だな

んて思ってもなかった。

少しばかり昔話をしよう。俺がモブになる前の話だ。

十歳の頃になった年だから、今から約八年前になる。あの日は、王立学院への入学前の身体検査だった。学力、体力。魔力などといった自分の実力を計り、クラス分けをするためのなんでもない日だった。

けれど、大人たちにとってはこれは社会における強者と弱者を決める社会的格付けだったのだ。夢など見ない方がいいと大人が子供たちの目に現実を見せる儀式だったに違いない。

残酷な大人社会への入り口だったのだ、あの日は。

しかし、彼らにとっても俺と言う存在はイレギュラーだったに違いない。

魔力検査をした時だった、俺を受け持った担当の女の顔がどんどんと曇っていった。俺の顔も当然曇っていく。検知器に嵌められている青い魔石が淡く点滅しているだけだったのだから。

魔石は全部で五色あって、その色ごとに保有する魔力の意味が違いくらい大きければ大きいほど保有する魔力が違う。

紫なら吸収。これは、魔力そのものを吸収するだけの魔石でかなり

珍しく、巷ではまずお目にかかれない。勇者の剣など、魔獣などを退治する武器に加工されているものがあるが一般人にはほとんど縁のない魔石だ。

赤なら制御。紫と違うのは魔力を吸収ではなく制御。そのものの魔力を消すのではなく、ただ抑え込む。大体、爪の大きさ程度あれば魔臓一つ分の魔力が使用できなくなる。

余談としては、子供たちはどんな魔力を持っているかわからないので子供時代に付ける魔力制御装置にしようされる魔石の大きさは直径十センチで、腕輪型が一般的というところだろうか。

黄色なら保有。生命体の中にある魔力と同じ性質で、これ自体が魔力の塊と言ってもいい。これはかなりの需要があり、一般的な魔具にはこれが大体使用されている。

緑なら治癒。ルックがしたような外面的な治癒魔法は使える者は多いが、肉体的破損などを治せる治癒魔法を使える者は中々居ない。その点、この魔石があれば使えない者であっても応急処置をすることが可能になる。反面、かなり高価だ。

最後に青。青なら検知。魔力に反応して光るのが特徴で、魔石発掘や魔力を検知する魔具に使用される。

「シャド・スペクター、残念ですが測定の結果、君には魔臓が一つしかないことが判明しました」

そんなことを言われた俺になんて期待されても困るということを皆理解すべきだ。

「しかも、反応からしてその魔臓もかろうじて動いている状態です。いずれ魔力がなくなる可能性もあります」

そもそも魔力は有限じゃない、無限のものだ。自然が俺たちに恩恵をくれるのだから。それがなくなるかもしれないと言われた俺に何かを期待するのが間違いだ。

すぐさま、あり得ない現状に置かれた俺に期待なんてやめてくれ。

「お、……僕は、大丈夫なんですか？」

「そう言った事例がありませんから、私の口からはなんとも言えません。これは上の方へ議題として今後……」

俺を受け持ってくれた担当の人はグダグダと何か言っていたが左から右に流れてく中、思ったのはハボン・メモリアの書籍に書いてあったモブという存在だ。

（普通じゃない俺なんて、モブだ）

特別にも普通にもなりそこねた俺は、モブだったのだと知ったのだ。

こうして、シャド・スペクターはモブであることを受け入れたのだ。

ま、結局のところ（再検査等を逃げたので）、なくなったらどうなるかなんて誰にもわからなくて、俺はそのまま大人たちに放置された。なくなったら無理やりにも最初の被検体にもなるんじゃないかな。死体はバラバラかもね。

今でも、時々検査したがる奴らが居るけど、実力行使されたパパンの権力によって華麗にスルー。俺は知らんぷり。モブになったので、もう生憎と関係ないのです。世界貢献？ なんのこっちゃ。と、今の今まで生きてきた。

（そんな奴に期待するなんて、皆馬鹿すぎる）

指輪してるのだって、魔力を全部使い切った時に回復できないかもしれないと怖いからだ。

なのに、メイリーと結婚？　なんで、俺が？　釣り合いも何も取れてないだろ。寝言は寝て言え。俺なんかよりも、もっとイイ男が世の中にはゴロゴロ、ゴロゴロ、ゴロゴロしてるのに、なんで俺なんかを選ばせる必要があるんだって話だ。

こんな俺に、どうやって幸せにしろというんだ。神さまから、きつと嫌われてる自然の恩恵も貰えないようなモブであり、逆チートだ

ぞ。

昔のヒーロー気取りは黒歴史だ。黒歴史。あの頃は若かったので無鉄砲ができただけなのです。

（同情も何もいらぬ代わりに、期待もされたくないのが俺なんだ）
わずかに膝を抱きよせる。

鈍い鈍いと言うけれど、世界を真っすぐに見ることできないモブの意見も聞いてくれ。

真っすぐに見て否定されたらもう、次こそ俺は生きていけなくなってしまうんだ。

自分を自分でしか奮い立たせられない俺の気持ちも少しは酌んでくれよ。

「シャド、今日も大丈夫、頑張れるさ。だって、モブだもの」

なんて、そんな弱音を誰かに吐いたりもしないから、そんな俺も悪いわけだけど。

モブはヒーローにも、ヒロインにも、サブにもなれない代わりに世

界に居ることを赦されている。

14・モブの生きる世界（後書き）

はじめて、シャドの弱い心を描写させていただきました。感想で次回とか言っていました、今回の次次回から勇者が本格的に動き出します。次回は名前くらいは出るよ勇者！

15. ちよつとずい

『……、……？』

顔に当たる陽の光に、目を開ける。

「寒っ……」

毛布を手繰り寄せようとして、床の上でそのまま寝たのだと気付く。

（……あー今、何時だろ？）

軋む体を伸ばす。それから時計があるところまで絨毯の上をゴロゴロと転がる。

「時計、と、けい……うげえ、まだ、五時かあ」

机から必死にとった時計の時間に呻く。早い、早すぎる。いつもなら六時半に起きてから準備を開始し、七時半に家出るのに、この時間はいただけない。

（次寝たら確実に起きれない。けど、早く行ったからといってあの

グータラなドルークさんが起きているわけもない)

ドルーク・ジャミルの日常。貴族らしく朝は十時までベッドの中で過ごし、遅めの朝食。その後、重役出勤よろしく城の騎士団に顔を出しては継母か姑のように騎士たちをいびり倒すのだから、実に、性格の悪い大人だと言えるだろう。さすが、あの日記を書くだけのことはある人物である。

残念なことに、あの人の愛が向くのは娘と嫁だけなのだ。

騎士団に入ったらルックもあの人にいじめられるのだ、ふへへ、いい気味だぜ。

聞いて驚け、ドルークさんの職業はなんと、なんと騎士団剣術指南役なのだ!! あと二十若かったら勇者パーティーに居たに違いない。実に、恐ろしいことだ。同じ時代に生まれなくてよかった。

(いいや、親父とも会いたくないし、良く考えたら俺の馬メイリーん家だし早く行くに越したことないな、うん)

ジャミル家に行くには馬で約三十分かかる(モブだけど、貴族だから乗れるのさ! ただし、爽快には駆けられないけども! 汗がキラキラとか幻想ですよ、皆さん!!)。

いつもはパカラ、パカラと愛馬を走らせてジャミル家へ向かい、そのまま馬を預けて研究所には馬車で行く。言っておくが、メイリーが馬に乗れないとかじゃない。俺がかつ飛ばせないだけである。はは、どこまでもモブな俺を舐めんな。

で、送った後また馬に乗って帰って来るのだが、昨日はルックに会いに行ったので馬はそのままなのだ(街からジャミル家までは三十

分程度)。

(歩いて一時間くらいかあ……朝から重労働とか、モブの仕事じゃないんだけどもー)

抱きしめていた時計のタイマーを止めてから、絨毯から体を起こす。

「よっこい……ぎよ、ふっ！ か、体が痛いだと……と、歳？」

時計を寝具の上に投げて(動いたら痛いから元の位置に戻せなかった)、そろりそろりとクローゼットへと向う。この痛みは床で寝たせいであって、歳の所為ではないはずだ。

まだ、十八は若いの、うん。なんか、変な汗が出てるんだけど。え、本当に歳じゃないよね？

その後、三回は「びぎゃ」とか「うぎゃ」とか奇声を上げたのは余談である。

はい、こちら頑張つて準備をし、もぐもぐと行儀悪くも朝食を食べながら歩いて来た現場のシャドくんです。なんと、今、不測の事態が起こってます。

体も頬も痛いし、まったくもっていいとこないな俺！ 何、殴られてもイケメン？ 照れるわん。なんて、はい、小芝居終了。現実、キュー！

「メイリー、今の台詞をワンモア」

「もう、出かけた」

繰り返されたまったく同じ言葉に視線を彷徨わせる。

現在の時刻、七時六分。いつもグース力寝てるくせに、居ないとかなんなんですか？ 喧嘩売ってる？ 買わないけど、売ってるよね！？

「知らないけど当分、朝早くから夜遅くまで用事があるって言うてた」

（くそつ、先手を打たれたっ！）

玄関の扉に頭をぶつけそうな勢いで、寄りかかる。

きっと、親父と結託して俺がいけない城へと逃げやがったな。ずっとこいぞ！ いつもは重役出勤のくせ、に……はっ、待てよ。このままだと俺外堀を埋めて逃げられなくなるんじゃないだろうか。

……。
……。

いやいや、それは、いかんよ。いけません。メイリーには名も知らぬ人の良さそうなイケメンと結婚させるんですからねっ！

「どんとこい！ 俺、頑張る！」

「何を？」

メイリーはわからなくて、いいのだ。俺がわかれば！ 問題なし！

「大丈夫だ、気にするな。それより、通いのメイドさんたちにちゃんと今日からしばらく昼飯いるって言ったか？」

「言っていない」

言えよ。何やってんだよ、もー。

メイリーん家は俺の家と違って、毎日の夜と朝の飯を作ってくれる通いのメイドさんが二人いるだけだ（ちなみに我が家の手伝いは、メイドさんが三人に、鬼バ、……オカアサマに同行している執事の計四人）。週に二回は掃除もこの人たちがしてくれる。が、彼女たちが来るのはその週の二回を除けば朝に夜の分も飯を作り、温めれば良い状態にして帰ってしまう。

今日は生憎とその日じゃないので、メイリーの昼飯はないということ

とになる。

「んじゃ、髪よりも先に冷蔵庫覗かないとだな。サンドウィッチくらいなら俺も作れるから、パンがあつたら昼はそれな」

「シャドが作ってくれるの？」

「はさむだけだ。誰でもできるし、食える」

サンドウィッチぐらい、余裕余裕。パンを薄くスライスして焼いたらマヨネーズかけて、ベーコンとトマトとかはさむだけだもの。何、バター？ 重石で押さえる？ めんどくさいので、そういう手順は一切省かせていただきます。食えば一緒だもの。パンも焼かなくていいぐらいだと思うんだ！！ つつこまれなかったら焼かない体^{てい}でいこう、そうしよう。手抜き上等でござる。

「ありがとう」

「おーおー、わかつたらちゃんとメッセージ飛ばしときなさいね」

曖昧にメイリーは表情を引きつらせ、頷く。メイリーは喜怒哀樂のうち喜と樂の感情があまり上手に出せない。こういう微妙な表情は、たぶん嬉しいのだろう。

（まー、手抜きするき満々なのに喜んで、うい奴、うい奴）

いつもみたいに頭を撫でようとした——気付かれないように腕をそつと、下ろす。

(……こういうのも辞め時、か)

ルックが言うように、俺の生活はメイリー一色に染まり過ぎている。たぶん、今も飯の準備とか普通にしてしまっているが、これもいけないのだろう。いろいろなことを少しずつ辞めなければならぬのだ。

長く一緒に居すぎて、皆、俺とメイリーをセツトのように扱うことに慣れ過ぎているのだ。

(うおー、少し寂しいとかマジで結婚式とか泣くぞ、コレ)

なんですかね、子離れに泣く母親の気分？ 子離れって寂しいのね、くすん。

でも、お母さん頑張ってメイリーに良い子見つけるからね、すんすんすんすん。誰か、バスタオルを頂戴！ 涙がちょちょぎれるの！！

「シャド、それまだ痛む？」

感傷に浸っていた俺の左頬に指がスツと伸ばされて思わず、仰け反る。

「わ、ちょ、何？ 何ですか？」

「じゅめんね？」

なぜ疑問形なのか問いたいが、それは一端置いとく。

てか、コイツなんぞ勘違いしているな。

昨日の俺のアンハッピーな出来事であるビンタとグーパンは同じく左頬にやられたので、自分がしたやつだと思っているのだろう。現在、白い湿布を貼っているのだから確かに目立つ。が、痛い場所を触ろうとするんじゃない！

「これは、お前にやられたのじゃないから。寝ぼけてベッドから落ちてできたやつだから！」

「メイドの人、治してくれなかったの？」

うっ。咄嗟に吐いた嘘を更に聞き返されるなんて思わなかったぞ。

ちなみに、治すといってもうちのメイドさんたちが凄いのではなく、緑色の魔石（小さいやつ）があるので、この程度の軽傷ならすぐにいつもは治して貰えるのだ！

だけでも、だっけどー。

親父が治すなって言ったようで、これは治して貰えてない。人の心の痛みを思い知れてやつ。兄貴贔屓め、横暴だぞ！

「親父にばれて笑われたくないから、早めに出て来たんだよ。あのクソ狸は絶対大笑いするに違いないんだからなっ！」

続く嘘もさらりと、吐く。嘘はばれちゃいけないですよ、ばれないならば真実じゃなくても事実ですから。ほほほ。

「治療魔法かける？」

メイリーもルックと同じく簡単な治療系は使える。かけてもらえば、比較的早く治るだろうし痛みは確実にひくだろう。

「いいよ、いいよ」

頼られるのも頼るのも少しずつ減らした方がいいのだろう。

（やん、ほんと寂しいんだけどもっ！）

バスタオルを誰か本当にください。涙が、涙がこぼれちゃうっ！
よよよ！！

「いいの？」

心配そうに顔を覗きこむ、董色の瞳。睫毛長いな、コイツ。

「人間には治療能力が備わってるんです！ 言っとくけど、頑丈なのだけ取り柄とかじゃないからっ！」

きゃーきゃー、言い訳を言いながらメイリーの様子を窺う。良かった、いつもの呆れ顔だ。

（よし、疑ってる様子はないな。しかし、どうしたらメイリーをイケメンと出会わせられるんだろうか？）

勇者はボツ。あんな気性の激しいのは駄目。もっとシレーナさんみたく穏やかで「ははは」とか歯を輝かせて笑う人を希望する！

（あーあ、すっかり小さなメイリーから大きくなっちゃって）

後ろから付いて来るのは変わらないのに、小さな少女はどこにもいなかった。

『わたし魔臓が五つあるって、すごい？』

笑う少女。

『おー、すげー』

絶望する俺。

守りたかったものなんて、とっくの昔に手の中から滑り落ちていた。

癖になっているのか、撫でたくなる手を必死に抑える。

君より弱い俺。

15・ちよつとずつ（後書き）

本作で出て来たサンドウィッチの作り方はクラブハウスサンドの作り方。個人的に、ベーコンはカリカリ派。ついでに、やや最後のところを変更しました。

16・某日某所（side：ドルーク）

「よく、いらしてくださいました」

綺羅綺羅と無駄に輝きを放つ青年にドルークは顔を顰めたかったが、後ろで踏ん返り返っているその存在にそれを堪える。

「本日はお招きいただきまして、ありがとうございます、陛下」

しかし、その存在を無視するかどうかは個々の問題であり、彼は当然のごとく国主にだけ軽く頭を下げた。自分より目下の者に下げる頭はドルーク・ジャミルは生憎と持ち合わせていないのである。

不快そうな感情を隠しもしない青年に、猥染みた男は浅く嗤う。

前日、夜。

今日のうちの娘はやや不機嫌だが、相変わらず可愛い。ただ、家に帰って来てみればもうすでに髪の毛を梳かした後だった。どんな髪型だったのか非常に気になるのである。プレゼントのところの下のジャリはうちのメイリーの専用の美容師になればいいと思う。婿などではなく、美容師になればいいと心から思う。どうして、あんなにも可愛いのだろう。やるのが勿体なくて死にそうだ。

ああ、シレーナさんにもう三ヶ月ばかり会っていない。愛が足りない、もふもふしたい。娘にしようとするやと冷たい目で見られるのが辛い。

書斎で日々の日課である娘の成長日記を綴っていたドルークは若かりし頃の見る影もなくなった友人からのメッセージに筆を止め、盛大に顔を顰めた。親子を知る者ならば、メイリーの性格は父親に似たのだろう可哀想にと言いたくなるぐらいの似具合であった。

うちの息子がメイリーちゃんとの結婚を白紙にしたいとか馬鹿なこと言いに行くそうだから、当分逃げ……

途中で切り、机に頬杖をつく。

「あのジャリが、殺すぞ……」

銀色の髪から垣間見える青紫色の瞳は、酷く冷たいもので血の通った人間と言うよりは血に飢えた獣のようだった。

持っていた羽根ペンをくるりと廻す。

可愛い娘に懇願されたための渋々の承諾であつたのに、向こうが断ろうとするなど言語道断である。それでなくとも、勇者だとか何とか言つわけのわからない人物からの面会の申し込みが昨日からひっきりなしにくるのだ。

いい加減、ドルークの堪忍袋の緒は切れそうだった。

（シレーナさんに会いたい、もふもふしたい！ あゝあゝ、親子そろつてなんと、忌々しいっ！！）

娘が一言「好きにしたら？」とでも言つた日には、妻を取られている日頃の怨みも含めて全てシャドに矛先は向くだろう。宿敵リーフがいくら現役を退いたとは言え、本気で殺り合つて無事でいられないのを良く理解しているゆえの判断である。

叩くなら徹底的に叩き潰すというのが、彼の信条なのだ。

コツ、コツ。

窓から聞こえる音に、神経を研ぎ澄ませる。人の気配ではなかつたので、ゆつたりとした動作でそこへ向かう。カーテンを開けた先には、赤い鞆を引っ提げたフクロウが一羽。

「ぴえー」

開けると言わんばかりにフクロウは鳴くが、赤い鞆に見覚えのあつたドルークはジッと見つめるだけだ。

「ぴえー」

再度、フクロウは鳴く。ドルークはそれに合わせてシャーっと、カーテンを閉めた。
すぐさま窓がガタガタと大きく揺れる。風のせいではなく、先ほどのフクロウだろう。

「夜に迷惑だ、出直せ」

「ぴえええっ！！」

無視を決め込むが十分経ってもフクロウの声も、窓への攻撃も止む気配はない。
あまりの煩さに愛娘が起きてくるのではないかと思い苦渋の末、窓を開けてやる。

「ぴえ」

部屋の中にフクロウは白い封筒を二枚投げ落とすと、満足げに夜の闇の中へ消えて行く。

（高々、封筒配達ごときで……）

本でも投げつけてやりたいが、国で管理された鳥である。殺したとなればさすがに、醜聞が悪い。溜息とともに殺気を殺し、封筒を拾う作業に入る。

一枚は何でもないただの白い封筒だが、案の定もう一枚は金の縁取りに、赤い蠟印が施されていた。

（召喚状を貰うことなどしたつもりはないが、一体なんのようだ？）

茶色い蠟印には赤い蠟印と同じく国王の紋章が入っていたので用件はこちらに書かれているのだろうと判断し、普通方の封筒を先に開ける。

（……チツ、しつこい男め）

殺してやりたいランキング堂々の二位である勇者が国王に頼んで、面会の場を設けたらしい。

時間の指定が翌日の昼前であることから、召喚状はすっぱかすなという脅しだろう。

ドルークは赦されれば勇者もボコボコにしてやりたいと本気で、思っている。

無論、問題は件の求婚騒動に他ならない。

（うちの娘の写真を無駄に世間に流した馬鹿に誰がやるか。あれなら、まだプレザントのジャリどもがマシだ）

指から炎を出して、二通とも焼き捨てる。

勇者のどこが気に食わないかと聞かれれば、一から百まで答えれる自信が彼にはあった。中でも、娘のメイリーの写真を新聞に提供したことは赦しがたい。

一瞬は自分の娘が新聞に載ったことに嬉々として新聞を買い漁ったドルークであったが、他の人物の手にも同じものがあることに気づいてからは憤りしか感じていなかった。腹いせに騎士団の面々を見つけては指導という名の気晴らしをしたものの、未だに燻っている。次に何が気に入らないかというと、写真写りが無駄に良い所である。娘よりも大きく載るなどもちろん、言語道断だ。その点に関してはシャドは合格点を与えたいぐらいだったが、先ほどのプレゼントの戯言により現在は大きくマイナスである。

目の前の青年をドルークは値踏みするように見る。

（これが、勇者か。フン、下らん）

娘のために早起きをし、会いたくない勇者にも会っているというのに褒められるどころか、朝から人に会う度に「今日は雨だ」、「明日は槍が降る」と罵られるか怯えられるか言われていないドルークの沸点は平常時以上にとてつもなく低かった。今や、沸騰直前と言ってもいい。

この勇者の無駄な輝きはドルークの怒りに火を注いでいた。

「早速で申し訳ありませんが、用件を窺っても？」

「うむ、この度は勇者ハイラント・ヴァリエンテが貴殿と会って直接話をしたいと」

「さようですか。では、どうぞ勇者殿？」

唇の端だけわずかに、上げる。

「貴方の娘であるメイリー嬢との結婚を認めていただけないでしょうか？」

（くたばれ、下衆が）

心とは裏腹に、にこやかに笑う。

「娘が承知しない結婚を親が承知すると？ 面白くない冗談だ、ははは」

乾いた笑い声が狭い室内に響き渡る。

最早、間合いに勇者が入ればドルークは平気で切り捨てるつもりで居た。

親まで巻き込んで、婚姻を成立させようとする性根が気に食わなかった。

自分の時は、本人を口説いて口説いた。周囲からはストーカーまがいとまで言われたが、それでも誠意のある態度は貫いたつもりだ。

「認められる機会だけで……」

「くどい」

（最低一億万回くたばれ、下衆）

顔に笑みを張り付けたままだが、空気があまりにも冷た過ぎて逆に恐ろしい空間がドルークを取り巻いていた。

業とらしく国王が咳をするが、気付いていないのか気付かないフリなのかそれはなくならない。

「娘に気に入りたいなら自分で、誠意を持って行動していただきたい。話は終わりのようなので、失礼させていただきたく存じます、陛下」

「う、うむ。好きにせい」

颯爽と去るその人に国王はホッと心の中で息をするが、唇を噛んで憎々しげにする勇者に別の意味で息を吐く。

「待つてください、ジャミル子爵！」

縋りつくような、挑戦的にも聞こえる声にドルークは顔だけで、振り返る。

「何か？」

「誠意があれば何をしてもいいのです？」

「お好きに」

続きがないようなのでドルークはまた歩き出した。

（ただし、うちの娘に手を出したら殺すがな）

上がりきった唇、静かに燃える瞳。

前方から今のドルークの顔を見た人間は、一生後悔したくなるような表情が見れただろう。

運が良いことに、扉の先の通路には誰も居なかった。

死を知らせる悪魔の微笑み。かつて、その人は銀の悪魔と恐れられた剣士。

16・某日某所（side：ドルーク）（後書き）

ドルークの婿選びの基準は、どちらが好きかじゃなくてどちらがマシかで判断している。基本的に、嫁と娘だけが世界に生きていれば彼は満足。たぶん、本作で一番底意地が悪い男はこいつだと思う。毎日、うちの嫁返せと呪っている心の狭いのがドルークなのである。ちなみに、勇者が何してくるかを決めてるけど、upはまだまだ先でございー。

17・鳥は不吉を運ぶ生き物

「何か入ってた？」

「ん？ ー、そーねー、ははははは」

冷蔵庫を開けた俺は目を丸くする。
入っていたのは夕食と調味料だけなのだ、ははは。

ぶっちゃけ、生返事しかできません！！

（普段からこれ夕飯入れるため以外に使ってなさそうなんだが……）

この綺麗さ加減はきつと、これってあれに違いない。「ジャミル家の人間はお料理なんてしなければ、もちろん、冷蔵庫を漁るような卑しい真似だつてしませんよ」っていうお手伝いさんたちからのアピールに違いない。

きつと、毎日その日の分の食材買って来ているのだろう。

……うわぁー、我が家と大違いだなあっ！

家柄だけ良いスペクター家ではとある人物がいると大量の食糧が貯蓄されることになっている。手掴みとか彼女は余裕である。

平常時だって、開ければちよつとしたものくらいは入っているのだが、これは酷いな、うん。

見なかったことにして、パタンと閉める。

「め、めぼしいものがなかったので、ドルークさんには夕飯外で食べて来てつてメッセージ出さない。お昼と夕飯は同じもの食べなさい」

それが最善です。

同じものが嫌とか駄々をこねてはいけません。

「いいけど、シャドのは？」

「俺の？　なんで、俺の？」

ここはメイリーさん、君の家ではありませんが、俺の家ではありませんが？

「シャドはお昼どうするの？」

ん？　何もしかして、ここで食べるか思ってる？　いやいやいや、食べないよ。家に帰りは、……しないけども。

だって、帰りづらい！！

親父にも会いたくないけど、またあのイカレポンチなシュロムが居たらと思うとガクブルしちゃうもの。もしも、鬼……オカアサマに告げ口でもされて（ある日帰って来るのだ、マジ怖い。あの人なんなの、人間なの？　そもそも生き物なの？）待ち構えられたりとかしたら死ぬ。死亡フラグがボコボコ立っちゃうから！　瞬殺されてしまうわっ！！

というわけですので、街でなんか安いもの食べます。大丈夫です、それくらいのお金はありますのでご安心を。モブ貯金から一部持ってきて来たのでご安心を！

「俺は、なんか街で食う」

「わたしも行く」

えーえーえー。

「お前は家に居なさいよ、自分ん家に居なくてどーすんのよ」

お前、俺がお前を人と合わせないためにわざわざ所長言いに行つたのに、何を言ってるんですか？　人の心を察するスキルをお前には所望する！！

「ずっと家に居るんじゃないの？」

ちよ、え？　はい？

「タンマ、ストップ。待て待て、ど、どこからその理屈は来たのか説明してくれっ！」

首をかしげても駄目なものは駄目です。絆されるシャドくんじゃありませんよ！

「髪の毛と化粧したら帰るの？」

「フツーに帰るけども」

「駄目」

服の端をギュッと掴まれる。

（参ったな）

頭を掻く。

眼鏡っ子にされた時は振り払えたそれが、やけに重い。たった三本の指なのに。

「メイリー、ここはお前の家で俺のじゃないんだから用事が終わったら帰るに決まってるだろ」

眉間に皺がぎゅぎゅつと寄る。

「メイリーさぁーん？」

そろそろ俺が折れると思ってるんだろ、ははは。折れてなんてやらないよ。甘やかしたりしません。だって、お前は……。

「くるっぽー」

鳥の鳴き声に全身が固まる。ギギギッと首を動かして、キッチンに備え付けられた窓に目をやる。

鳩だ。

赤い鞆を引つ提げた鳩だ。

エマーゼンシー、エマーゼンシー。あれは、大変危険である。

「ぽおー」

眼と眼が合う。鳩は片翼を「よっ」と手を振るみたいに上げる。

（め、め、目が合っちゃった？ き、気の所為ならいいな！）

鳥は不吉だ。特に、昼の鳩と夜の梟は不吉だ。赤い鞆とか引つ提げてたら、ダッシュで逃げる他ない。逃げちゃ駄目でも、逃げて逃げて逃げまくりたい。

「ぽっ！」

だって、奴ら国で偉い人からの手紙運んでくるんだもの。

鳩は、窓枠の隙間に青い封筒を挟むとどこかへ飛び去る。

とりあえず、ここに来たってことはメイリー宛てでいいですか？
わざわざ王さまとかその他の皆さまが俺を指名手配して手紙出したとかじゃないですよね！？

「手紙」

「うん、わかってる。知ってる、目が合ったから、知ってる。青いのが見えてる」

窓に近づく決心ができないしていると服の端の重みが消えて、いつの間にかメイリーが青い封筒を持っていた。

思わず、手で顔を覆う（目のところはばっちり指が開いてます）。

「誰から誰、宛？ 俺、お前？ どっちかきっぱり、さっぱり、ざっくり頼む！」

「わたし宛てで、裏のサインはGって書いてある」

G。ガギゲゴで偉い人なんて、特に思い当たりませんか？

つか、俺じゃなかったか、ふう、一安心だぜ！

考えている間に、メイリーは封筒をバリバリと破る。レターナイフぐらい女の子なんだから使おうね、はさみでもいいんだよ？

「拝啓、メイリー・ジャミル殿。空は深く澄み渡り、さわやかな季節となりましたが朝晩の冷え込も」

ああ、いつの間にか手紙音読会が。できれば、季節の件とかは飛ばして読んで欲しいところです。読むにしても心の中だけとかにして欲しいなあ。

「この度は、不躰な手紙を送ることをお許しください。我らが勇者の恋を応援する一人の者として筆をとったまでのことなのです。つきましては、一度お目通り頂けたら幸いです。明日のご予定はいかがでしょうか。お返事をお待ちしております」

季節の件はやけに長かったのに、本題短いな。なんだ、無駄に教養を見せつけようってことか？　そして、勇者の恋を応援するだと、断じて許しませんよ！

「勇者パーティー代表、グランツ」

勇者パーティーのグラン、グランツ？

「それ王子じゃね？　第一王子じゃねっ！？」

やたらと眩しく輝く王子の姿が浮かぶ。確か、選定式の際に「国のために剣をとらせてください」とかやたらとこの人カッコいいこと言っただよ。

ま、皆さんご存じでしょうが、俺なら言わない。人の影から「わー

わー」言う係りです。モブの仕事ですから、その時も「わーわー」言いましたよ（キリッ）。

「うちの国の王子ってグランツって言うの？」

「おま、それ、絶対外で言っちゃ駄目だからね！ 不敬罪もいいところだから！」

自分の国の王子知らんって如何なものよ！ あー、でも勇者のことモコイツ知らんかったしな。当然と言えば、当然？ 当然で流していい話題なのだろうか？

流しちゃ駄目だよな、だってあのドルークさんですら王さまに敬語使ったりできるんだから！！

白い便せんが差し出される。

匂い付けしてあるようで、爽やかな匂いが香る。良い便せん使ってやがんな、さすが王子！

「断りの返事書いて」

「いやー、お兄さん断ったらこれは不味いと思うよ」

あと、返事の自分で書いた方がいいと思うな！

「わたしは不味くないけど？」

「メイリーさん、良く聞いてください。相手は国の王子です、いずれ王さまになる人です」

釈然としないようだが、メイリーは頷く。

「俺たちは貴族です。あつちのが立場が上です。はい、質問です、断っていいでしょうか？」

「良いと思……」

「思っちゃ駄目です、向こうは断られるとか思ってます。態々やつて来るって言ってるんですから、返事も明日の昼二時にお待ちしておりますとか書きなさい」

眉が不満そうに八の字になる。

「ええい、そんな顔しても駄目なものは駄目!!」

その部分を指でつつく。

「むっ」

可愛く唸っても、心を鬼にする。全てはメイリーのためなのだ。

「書いたら今日、家に居てくれる?」

「はひ? いやいや、それとこれとは話が違……」

「居ないなら書かない。あと、明日王子と会う時も一緒に居てくれないと駄目」

(やれやれ、子供みたいな我儘言っちゃって)

メイリーは、時々うんと小さい子供みたいな我儘を言う(勘違いし

ないでくれ。一度として、大人っぽい我儘をこれは言ったことなどない。そんな日が来たら俺は卒倒します。そういうイチヤコラはどこかで誰かとやってくれ。無論、報告はいらんよ！」。

断ったりしないので、言いやすいんだろうか。もっとそういうのは、お願いを叶えてくれそうな人に言うべきなんだけども。

ドルークさんとか、ドルークさんとか、ドルークさんは確実に叶えてくれるぞ！

「はいはい、約束約束」

少し嬉しそうに赤らむ頬、輝く目。

付き放そうとしているはずなのに、結局俺は甘やかす。根性が足りてないな、うん。

「指きりする？」

「信用ねえな。しなくても破らないから」

嫌われる覚悟が、できてないんだなと思い知る。

甘やかさないで突き放すことで嫌われるのが嫌なんだ。

（お前はズルいな、ほんと）

問答無用で、絡まる指と指を見る。

先に手を離すのはお前に違いないのに、俺が離そうとする時は何時だって躊躇わせる。

何でも出来て、何一つとして俺より劣ってないのに、俺なんかになんで頼るのか。理解できない。

どいつもこいつも俺に本当に期待するなよな。

皆さま、その期待にいつまでも応えるのは無理なんですけども？

今でも頑張ってるんですけど、ご存知ですかっ！？

王子さま、勇者以外のイケメンの情報提供をどうせならお願いします。

17・鳥は不吉を運ぶ生き物（後書き）

カウンター越えてしまった。どんどんシャドは突き放そうとします。駄目な奴なのです。次回はお待ちせのメイリーサイドです。微妙に追加。

18・気づいて（side：メイリー）

「手紙書き終わ……た、よ」

「シャド？」

椅子に座っているシャドに、書き終えた手紙を持ったままメイリーは近づく。

閉じた瞼、規則正しく上下する胸。

（む、寝てる。せつかく手紙書いたのに）

シャドは家に留まっではくれたが、代筆だけはしてくれなかった。「王子さま」の返事は自分で書かないといけないとメイリーにそう言い聞かせた。

（いつもはしてくれるのに。……？　なんか、顔色……悪い？）

白い肌には更に白い湿布薬。それだけでも痛々しいというのに良く見れば、薄らと目の下に隈ができている。

手紙を持っていない方の指を伸ばして顔にできるだけそつと、優しく

く優しく手を宛がう。

「んっ……」

触った途端、シャドが体を振る。良く眠っているように見えて、眠りが浅かったのかもしれない。
しかし、数秒経っても彼は起きる気配がない。

（寝たまま、良かった）

一端は安堵するが離すべきか、もう少しこのままで居るべきなのかが次の問題となって降りかかってきた。

……。

……。

……。

息を呑む。

（このまま、もう少しなら、いい？）

なるべく手を動かさないようにして膝を折り、体を寄せる。

（今日のシャド、いつもと違うみたい）

いつもならただ、そこにあるだけの薄い被膜が今日は絶対防御をするために作られた大きな壁の様に自分の前に立ち阻むのだ。

『ええい、そんな顔しても駄目なものは駄目!!』

いつもなら少し喰い下がれば、「わかった」と言ってくれるその人がした拒絶。

（なんでそんなことするんだろう？）

顔から手を離して、背中に手を廻す。

「そんなの駄目。嫌だ」

自分の長い髪が垂れ下がって床の上に金色の泉を作っていた。

（まだ髪してくれてない。頭も今日は触ってくれてない）

「わかった」と言ってくれない。頭も撫でてくれない。

いつもと違う今日。今日が違うなら、明日もいつもと違うものが続くのだろうか。

寂しい、寂しい。

乱暴に頭を腹部に押し付け、手に力を込める。勢い余って、ぐしゃりと書いたばかりの手紙が握りつぶされる。

「ううん」

小さな唸り声。だが、それもすぐに止む。

行かないで、行かないで。

（誰かシャドに入れ知恵した？ ルック？ 昨日会って言ってた。それに、顔もぶつけた跡じゃない……）

シャドは無意識の様だったが、頬だけでなく首もしきりに気にしていた。

本当にぶつけたならば首を気にするとしても湿布が施されたのと反対側だろう。同じ側を気にするのは首の筋が伸びるような衝撃を受けた時——殴られた時だけ。

（なんで嘔吐くの？ わたしが何かした？）

自分を呆れるような、憐れむような目で見るその人をメイリーは初めて見た。

優しさのない残酷なまでに澄んだ瞳。

行っちゃ駄目、行っちゃ駄目。

（勇者も王子もどうでもいいのに。シャドだけでいいのに……）

「好き」

眠るその人の唇に、自分の唇をそつと重ねる。

やはり呻くだけで起きないシャドの腹部に、先ほどと同じようにまた頭を戻す。

ゆさゆさと揺れる感覚。

「な、に？」

気だるげにメイリーは目を開ける。

すぐ傍にシャドの顔が近くにあって近づけようと手を伸ばすが、それは他ならぬシャドの手によって妨げられた。

がっちりと手首をシャドが掴む。

「おいこら、眠り姫。なんで、お前は俺の膝の上に頭を乗せているのかね？ 今しかも、睡眠妨害に対する反抗意見としての頭突きか、こぬやろー」

「シャドが寝てたから？」

「そこは起こそうよ、しかも、あーあ、せっかく書いた手紙ぐしゃぐしゃじゃないか。もう一回書き直しです」

握りつぶされた便せんが顔に押し付けられる。

「もう、めんどくさい。お腹も減った」

「明日来るって言ってんだから早く返事書かないとでしょうが！ それよりも、今何時だ？ どれくらい寝てたんだろっ、あー、しくったー！」

「勇者も王子もどうでもいい」

（シャドだけでいい）

膝の上に頭を戻そうとするが、今度は自分の手に阻まれる。正確には、手首を持ったシャドがメイリーの手を使って顔を戻させてくれなかった。

メイリーは顔を顰める。

「良くない良くない、もう、いい子だからもう一回書きなおそうね！」

「もう、嫌」

見ず知らずの人間に対してもう、時間を割きたくなかった。

「嫌じゃない、嫌じゃない。ほら、お昼食べる前にもう一仕事、ね」

「シャドが悪い」

寝てたシャドが悪い。いつもみたいにしてくれないシャドが悪い。

「えー、ちよつとつたた寝したら全部俺のせいなの？ えー、すつごく理不尽ー」

「理不尽じゃない」

顔を抑える圧迫感、手首に籠る優しくない痛みと温もり。

『泣きそうな顔はなし、スマイル！ 大丈夫、たぶん、なんとかするから！』

子供の日の言葉、あれはもう無効になったのだろうか。

（なんで泣けないんだろう）

泣きそうだったら、「大丈夫」だとシャドは言ってくれるに違いなのにな。

「シャドのが、理不尽」

「なんとっ！」

手から痛みも温もりも消える。

シャドは自分の顔を押さえて「メイリーの理不尽に全世界の俺が泣いた」と、いつもみたいに変な喋り方をしてこちらを指の隙間から窺う。

優しい目、好きな緑。

（いつもの目だ）

薄い被膜越しの目。

「メイリーさあん、お兄さんのお願いです。頼むから手紙の返事書いてよー、しくしく」

「ご飯食べたら、ね」

「今書いてくれよ」

「お腹減った」

グーッと鳴ったお腹の虫に「腹の虫さえ空気読まない、何この子」とシャドは文句を付けるがメイリーはそれをただ見ていた。

「減った」

「さつきから、減った減ったって！ お前、女の子なんだから、すいたって言いなさい！」

「すいた、ご飯」

「なにこの子、可愛くない」

シャドの手をとって台所へ向かう。

ここに居て、ここに居て。一人じゃ寂しい。

貴方だけ好き、貴方だけが好き。

勇者も王子もそんなものに興味も意味もないのだと気づいて。

貴方以外はなんの意味もないことに気づいて。

「お昼シャドの好きなものあったらあげる」

「そ、そんなんじゃ騙されてあげないんだからね。でも、ください」

「うん」

笑うその姿が好き。

でも、この瞬間に、すべてが、

18・気づいて (side:メイリー) (後書き)

またカウンター越えた。映画は立て続けに見るもんじゃないな。今回は、寝てる時って人って超無防備だよなって話でした。眠い。また、明日文章追加したら、すみません。

19・残念な禁忌の魔術師

「解剖ってどう思う？ あたし、ぼくのこと解剖したいのよ」

俺が初めていろんな意味で身の危機感を感じた日であり、世界中の誰よりも幸せそうに笑う人物を見た日だった。

「ダーリいいンっ！ あんな顔面崩壊女なんて捨てて、あたしのところに戻って来るって信じてたわっ！」

店に入るなり、ひしつと抱きつこうとする女がこちらに突っ込んで来たのをさらりと避ける（足をひっかけたりしないのは優しさ、叩きたい）。全力疾走を手加減なしに避けたので、俺が入って来た扉に凄まじい音を立ててぶつかる。

「ああーん、ダーリンのいけずう。なんで、避けるのお？」

額の真中を赤くしながら女は悲しげに俺を見る。

黒い瞳に、肩口で切りそろえられた黒髪。すべすべの白い肌に、ぷっくりと膨らんだ唇に塗られた濃い赤。

「ええい、軽く三十は超えてるくせに、甘えんなっ！　そして、いい加減、若づくりをやめろい！」

「年齢のこと言っちゃ、いやーん。ダーリンったら女の子の敵い」

自称年齢、二十歳。実年齢、不明（出会った時から姿がまったく変わらない。噂では十年はこのままとかなんとか）のこの女はレイン・ドウンケル。

禁忌の魔術師という通り名を付けられるような彼女は実に不本意ながら、国が誇る中でも優秀な魔術師であり、俺が嵌めている指輪を作った人物である。

「女の子って年齢じゃないだろうが！」

痛がる額をデコピンする。

できれば、一生会いたくなかった非常に残念な人物である。

「いたあい」

年齢に見合った落ち着きをこの人にはぜひ、身につけて欲しいと俺は本気で思っている。

店に来るまでの経緯は実にシンプルである。ここ以外、行く場所がなかったのである。残念なことに。

昼飯を食べ終わった俺は、メイリーに手紙を出すという大義名分のもとジャミル家から脱出することに成功したのだが、当然のごとく家に帰りたくないわけである。おまけに、明日は勇者御一行さまとの会いたくない出会いのオプション付きだったので殊更気分はへこみっぱなしである。

去り際、『明日も早く来てね』と言われて「何の拷問？」って返そうとした俺は絶対悪くない。明日は平常時の八時出勤させていただきます！

しかし、である。下手に街中を歩いて眼鏡っ子や知合いにも会いたくないわけだ。

そんな時、頭の中に浮かんだのは、王都の端っこにあるレインの魔具屋だった。

レインはこんな通り名と性格のせいもあって、人から避けられやすい体質のようだ。理解でき過ぎて困る話だ。

「ライン、ラン。シャドくんが干し肉を持って会いに来たよー」

「しゃど、しゃど」

黒い狼が主人と同じような勢いで走って来る。マジ可愛すぎて、ハ

ゲそう。毛根頑張つて耐えてくれ。

「干シ肉ー！」

「ほれ、ほれ。うーり、うりうり」

名前はラン。こんなにも可愛いのに一般的に言う魔獣であり、勇者や一般の方々にそれがばれたならばザックリとやられてしまう存在なのだ。なんとという理不尽！！

見た目、大型犬だし意思の疎通ができるのに、何がダメなのかさっぱりだ。

「ちょっとお、ダーリン。こんなにいい女が目の前に居るのに、どうしてそっちに行くのよ」

「俺は今日はランに会いに来たの」

額をレインは摩っている。衝突した箇所にてコピンをされて痛いのだろう。

「指輪のこと以外でダーリンが来るのなんてそんなものですよねー、ふーんだ！」

レインは適当に置いてある椅子に腰かける。陽が丁度入ってくる位置にあった椅子なので、逆光で彼女の顔が見えなくなる。

「てっきり、何か言いたいのかと思ったわ」

「別に、何もありませんよ。ええ、ほんと」

家に帰りたくないだけである。

「嘘が下手ね。ま、ダーリンのこと愛してるからあたしには何でもお見通しなんだけど」

解剖しようと近寄って来た人間が何を言うんでしようね？

レインはある頃から、「愛してる」だの「好きだ」だのと言い始めた（ダーリンもこの頃から）。これもギャグの一環に違いない。突飛押しもないのは彼女の常で、気にしたら負けなのだ。

「家でなんかあったでしょ？ 勇者がああ顔面崩壊女に求婚したら、何かいろいろ言われた？」

「そんなのは、ない。むしろ、俺を愛してるってんならその頭の中に詰まっている魔臓やら魔術やらの知識を教えてほしいもんですな」
悔しいことにレインは魔臓に関して、一般に出回ってない知識を持っているようなのである。メイリー以上のこの奇女に俺が絡むはめになったのもそのせいだ。

表には出ないが優秀な魔術師がいるとの噂を頼りの探しあてたのが、まさか自分を解剖しようとした女だなんて理不尽過ぎて二日間泣いた。

「あらん、いつも言ってるじゃないの。ダーリンが「愛してるよ、ハニー」って言ったら教えてあげるって」

「誰が言うか」

投げキッスを手で叩き落とす。

「こんなに愛してるのに、酷いっ！ そんなこと言つと今後ダーリンの指輪のサイズとか作り直してあげないんだから」

「すみませんでした」

即、土下座。この指輪がないのは困るのです。

「じゃあ、例の言葉を、さん、はい！」

「調子に乗るな」

「乗ルナ、ルナ」

「ランまで酷いっ！」

レインは椅子にのの字を描きながら呪いのようにブツブツと呟く。

「愛されてるのは知ってるけど」とか寝言が聞こえたのは、まだ寝ぼけているせいに違いない。

「あ、そうだ、ダーリン。これあげるわ」

彼女はポケットからごそごそと何か取り出し、俺に投げつける。

「ペンダント？」

店に売ってある商品かと思っただが、見たことのない。

ペンダントのつくりは至って簡単で、模様の入った紐の先に黄色い魔石が三つほどあるだけだ。

「通信機。ダーリンがやばくなったら助けてあげようと思って」

きゅん。シャドの中のレインのいい人レベルが一上がった。

「呪文は、「愛してるよ、ハニー」で発動するから」

どーんどー（略）。シャドの中のレインのいい人レベルが底値になった。

「作り直せ」

「えー」

「んなん、恥ずかしくて使えるか!?!」

この女に誰か一般常識も与えてやってくれ!!

「乙女心がわからない人ね」

やれやれと言っているが、お前は決して乙女などではない。
全世界の乙女に謝れ! 今後出会う予定の運命の乙女に謝れ!!

「腹減ったから、もう帰るわ」

ぐーっと鳴ったお腹。そろそろ夕飯時に違いない。

作り直させるのに、だいぶ時間がかかってしまったな。まあ、ランをもふれたので全然平気なんですけどね！

「あーん、まだ来てちょっとじゃないの。甘い夜のお泊りコースはあ？」

「あるか！！」

ランを一撫でしてから、俺は店の出口へ向かう。

「ダーリン、ほんとに困ったらそれで助けを求めるのよ？」

「へいへい」

ペンダントを服のポケットに詰め込むと、レインが満足そうにしたので反射的に「これ、本当にただの通信機だろうな？」少しばかり、疑った。

「ダーリン、またね」

基本的には、禁忌の魔術師と言われているレインではあるがいい人である（作り直してくれたので、底値脱却）。

「指輪の調子がおかしいか、ランに会いたくなったら来る。あと、ちゃんとその赤いデコに治癒魔法かけろよ、見てるこっちが痛そうだからな」

「捻くれててもそこから、愛を感じてますう」

基本的にはの話である。

『断固として、断るっ！』

小さな子供は涙目になりながらも、言いきる。

『ちょっとだけでいいのに』

『ちょっともクソもあるか、人でなしがっ！』

「あーあ、行っちゃった」

昔のことを思っ、レインはくすりと笑う。

獣が牙をむくようにして怒った子供が、自分の感情を殺したただ平穏を求めて生きる青年となるとはさすがの彼女でも思わなかったことだった。

（ちよつとちよつかいを出したら、この国ともさよならの予定だったんだけどなあ）

この国に来て丁度、十年。

今では、禁忌の魔術師レインと呼ばれるようになった自分にも彼女は嗤う。

老いを見せないということと、王宮からの誘いを断っただけで名付けられたこの通り名。

（別に禁術を使っているわけでもないのに、ほんとみんな馬鹿で困るわねえ）

単に老化しただけのことを、一様にはやし立てる馬鹿な周り。人の苦勞も何も理解しようとしてもしない彼ら。周りが老いていく中で、自分が老いないという事実を突き付けられたというのに。

世界は理不尽で、そこに住む人間は誰しもが理不尽だった。

彼女が知る限り、違ったのはシャド・スペクターだけだった。

（ダーリン、一緒に逃亡生活してくれないかしら）

同じ場所に長く居続けられれば老いを失ったことがばれ、レインの体は羨み、妬まれ。畏怖される。意図したものかどうかなどはそこに関係なく、だ。

長い時間の間に様々なことを学んだ。魔術に人より長けているのもそのせいに過ぎないが、彼女にしてみれば少しでも生きやすくしようという努力だった。

過去には魔術を売ってほしいと言われたこともあるし、断って命を狙われたこともある。十年は一か所に留まるには、長過ぎる時間だ。彼女が今ここに留まっているのはただ、単にシャドのためだった。

「ずっと皆歳をとらなければいいのにね、ラン」

名前を呼ばれた獣は、長い舌をだらりと垂らしながら主に近寄る。

「れいん見タイニ？」

八年経った今も自分の手に縋ってくるのだ。縋らずには居られなかっただけなのとしても、振りほどかれることになれたレインにとつてはその手の温もりは愛おしかった。

シャドの変わらない根本とも呼べる部分をレインは愛していた。

「……んーん、今のままでいいだけ」

軽く、首を振る。

（そう、この先、彼の本質が変わらないことをあたしは望むだけ）

レインから言わせるならば、シャドの周りは自己中心的な、歪な人間の見本市のようなものだ。

自分に溺れた自己中心的な勇者。

罪を人になすりつける王。

親馬鹿な男と、人の言うことを最善と思い従うだけの父親。

人の痛みなど知らん顔の母親。

嫉妬と憐憫に浸る兄。

表面上だけの親友。

（一番最低なのは、愛を免罪符に自由を奪うあの女ね……）

おかげで、狼に囲まれた羊は食われまいと息を潜め、心を殺し狼の

毛皮を被ってしまった。

「思っただけど、皆、心根ではダーリンのこと嫌いなんじゃないかしら？ 過度な期待は押し付けるし、意思にそぐわない意見は全て抹消だし」

「干シ肉クレルカラ、しゃど好きダ。撫デルノモ、ウマイヨ？」

ランは人に親を殺された魔獣だ。

ただ、魔獣は人に害する力を持っているというだけなのに。他の生き物と何も変わらないと言うのに家族を奪われ、自身の命も狙われたそんな生き物。

瀕死のところにレインが出くわさなければ死んでいただろう。

シャドがランのことを知ったのは偶然だった。拾ってからあまり経っていなかったでランが犬のフリが下手だったのだ。奥に隠していたのに、実に子供とは目ざとい。

「優しいわよね、あたしも好きよ」

レインを利用するだけの人間は沢山居たが、心配し触れてきたのはシャドだけだった。ランのこと魔獣と知った上で、優しく接したのも。

「ダーリンの手って温かいのよー」

「ホカホカ〜」

すり寄る獣を優しく撫でる。

「三人ならどこでも幸せなのにね」

理由もなく、人に疎まれた人と嫌われた獣は理不尽の痛みを知っている。

19・残念な禁忌の魔術師（後書き）

シャドの現在唯一の味方、登場。あと、わかっているだろうけど、キーパーソンでもあります。ちなみに作中、シャドは嫌いみたいな表現をしてるけど、尊敬もしてるしなんだかねで好きです（母親見たいに思ってる）。女言葉を時々使うのがこの人の影響ならおいしいなw 本当は一話クッションぽい話をいれるかどうか迷ったが、シャドの暗い話は次回に回す予定。次回ついに、あの子の名前が明らかに！！

20・嘘の後ろ（前書き）

いつのまにやら3000件を超えるお気に入りをしていただけたよう
うで、感謝の言葉がありません。

飽きられない様に頑張りますので、今後ともよろしく願っています。

20・嘘の後ろ

「明日も早く来てね」

幼馴染が言った言葉を今俺は、思い出している。

とあるところの意地悪魔術師も言う。

「またね」と。

別れとは総じて寂しいものである。

しかし、反対に出会いは苦いものであるものもあるが、心温かくなるものも確かに存在する。

俺は後者を今、切実に望んでいる……。

「ちょっと、ポニポニさんよ。なあんで、あーた俺から逃げるのよ」

「ぶるぶるぶる」

家に帰ろうと諦めを付けた俺に待ち受けていたもの、それは――愛馬ポニポニ（可愛い名前でしょ？俺が、命名。家族も皆自分の馬に名前付けてるけど、やたらと長いので割愛する）からの乗馬拒否。

「一緒にお家へ帰ろうじゃないか。人参も家にはあるのよっ！奮発して林檎も付けちゃうよっ！」

前足を上げての戦闘態勢は未だ解かれない。

「ひひーん」と鳴く姿は「あんた、近寄らんといてえな」と言うようだ（ポニポニはレディである）。なぜだ！！

「俺の何がいけなかったと言うんだ、ポニポニ。お前のことをこんなにも想っているのにつ！」

ポニポニは怒ったように俺に鼻息をかける。う、臭っ。

その際、ふわりと黒い毛が飛ぶ。ポニポニは俺とお揃いの栗毛なので持ち主はただ一人である。

（ランっ！）

あの時のもふり合いがまさかここで悲劇を生もうとは……。けど、後悔はしてない。なぜなら、ランが可愛かったから。もふれて俺の心は満足したからっ！

「う、浮気してごめんよ。ポニポニ、今から心を入れ直すからあ」

抱きつこうとして、鼻先に蹄が突き出される。次はないってことですね。了解しました、よし、撤収ー！！

「匂いが消えるまで近くを歩いて参りますので、暫しお待ちください」

「ひひーん」

なんか、「当たり前よ」って言われた気がする。

意思の疎通ができる主従関係って素敵ね……言っとくが、俺が主！

ぐうぐきゅるる。

泣きつ面に蜂と言つのでしょうか。お腹もすきました。ま、レインのところに居た時からすいてたんだけども。

（露店で何か食うか）

食事の後は、どっかで毛取り用のブラシを買ってフローラルな香水の試供品でも試しましょう。これで、ポニポニさんの機嫌も直るはずです。人参と林檎も忘れてはいけません。機嫌を損ねたら、クソ我ま……愛馬さんに乗らずに帰るはめになりますからね。

……シャド、これは必要経費だ。

財布、今月軽いな。給料日が恋しいな。なんて思って泣くな、俺！

くん。

くんくん。

おやおや、おんやー？

良い匂いがするではあーりませんかっ！

頭ごと視線を動かして匂いの元を探せば、体格のいい男が露店で何かを焼いているようだ。炭に肉汁が垂れる音、灰色の煙。た、たまりませんっ！

興味津津に近づいて、網の上のっている物を見る。

「兄ちゃん、若鶏の串焼きどうだい？ 今日の鶏はサイコーだぜ、見てくれよこの肉汁っ！」

「た、確かにっ」

立て札には一本、ニギニーと書いてある。むむむ、微妙に悩む値段である。

「そこの彼女と二本で三ギニーでかまわねえからよっ！」

「彼女？」

横を見る。

「おん？」

分厚いビン底眼鏡、癖のある髪。

見たことある人が居た。

「え？」

またまた、ブッキング。

勇者といい、眼鏡っ子といい、俺の行く先に現れるのってストーカ
ーじゃないの？

「あああああああああああああああつ！」

おーう、ルック並に鼓膜を破らんとする声いただきました。

おかしい。

おかしすぎる。

何がおかしいのかと言うと、なぜ街の噴水に眼鏡っ子と俺が腰かけて串焼きを食べているかってことだ。俺の自腹で。

言つとくが、俺は帰リたかつた。もう、帰る氣満々でしたよ。

そしたら、また服の裾を掴まれたわけよ！

メイリーも居ないし、ここで振りほどいたら俺極悪人じゃん？ メディアって何書かれるかわんないからね、怖いなっ！

自腹の理由は、財布出してた癖に「奢ってくれますよね？」的な視線で見られたの！ 店の人も「彼女じゃなくても二人で三ギニーでいいよ」って言いやがって、知人でもなければこの子パパラッチだからっ！

「美味しいです、ありがとうございます」

はふはふと口を動かす眼鏡っ子。本当に美味しそうに食べやがって、請求とかし辛いだろうっ！ 男が女の子に物を奢るなんてルールは滅びてしまえ！

もしくは、可愛い運命の彼女にだけ通じるルールになれっ！

しつこいようだが、俺の好みは素朴な感じである。

隠れ萌え要素とかいらないのであるっ！

「さようで」

三ギニーが財布から転がり落ちたと思えば良いんだ。俺もむしゃむしゃするから、良いんだもの、ぐすん。

むしゃ、あ、うまい。今度からあの店は贖屋にしよう。

「私、リユネット・ラブルって言います」

誰も自己紹介期待してないんだがね？

「そうですか、で、何か？」

「スペクター伯爵や、ジャミル子爵に連絡取りましたけどダメでした。……スペクター伯爵は本人から許可をとれと言われましたし、ジャミル子爵は肖像権で訴えるって言われました」

ずーん（これは、眼鏡っ子もというラブル女子から発せられた効果音）。

「でも、スペクター伯爵子息は本人ですよね？」

ちらり（これも、彼女の効果音）。

「俺は何も言わない」

ずーん、ずーん（略）。

音が重くなっても言わないものは言わない。勇者より自分を選んで貰ったつもりもないし、メイリーに悪評はごめんなのである。

「仕事なんて諦めれば？ 向いてないって」

「なりたくてなったんです！ 人の気も知らないで……」

「知るわけないじゃん、俺はメイリーの味方であつても君の味方じゃないもの」

「うっ」

眼鏡っ子、泣きそうになってます。

ほんと、勘弁。見て周り、ひそひそと酷いこと俺言われてるから。ここは修羅場じゃないです。俺、無実。

絶対、君向いてないよ。人のこと考えないライターなんて三流だからね。

「私初めての仕事なのに」

「だから、何？ 知らないよ。てか、関係ない。あのさ、皆、人のことじゃなくて自分のことで手いっぱいなんだから気にして貰いたかったら人に優しくでもしたら？ 大体、お願い事する人間がその人に甘えてどうするの？」

驕って貰って当然と言う意識は捨ててくれ。

あと、メイリーを悪者にするようなのもやめていただきたい。モブならばインスタント悪役にはなれるので、一度だけなら悪役にしていただいてもいいですよ？

「じゃあ、どうやって記事を書けばいいんですかっ!？」

「さあ？」

首をかしげる。

「大体、俺に聞くのは畑違いってもんです。けど、一言言えるならあんたの言葉であんたの目に映ったままを書けばいいんじゃないの？ 捏造写真をとるようなこととか、空気の読めないのをやめるとかは鉄則ね」

眼鏡っ子は俯く。

よしよし、この調子で記事など書かなくなれ。けけけ。

え、良いこと言っておいて、心の中はそれ？　ははは、あたり前じやないか。目に映ったままメイリーの奇女っぷりを書かれて御覧よ、嫁の貰い手がなくなるわ！

俺のイケメンとメイリーちゃんのラブラブ計画が潰えてしまったら誰が責任とってくれるんだ！

メディアに一言言う。嘘を伝えないのは良い心掛けではあるが、ありのままの事実が良いとは限らんのだよ！

「何も最初から、一面とるような仕事じゃなくてさ、もつと簡単な仕事から始めるとかすればいいんじゃない？　新人なんだから別にいいだろ。むしろ、記事なんて誰かが目を通してくれたことに意味があるんだから、スペースの大きさとか関係ないって」

「……なんだか、勇者が勝てなかった理由がわかった気がします」

おん？　なんですって？

「スペクター伯爵子息はジャミル子爵令嬢がお好きなんですネ」

「はいっ!？」

何この子、何言ってるの。好きか嫌いかで聞かれたら好きだけど、それは幼馴染のそれぞんす。お馬鹿さん、なんぞんす。

「幼馴染だからって、ただだよ」

メイリーの幼馴染でもなければ、伯爵の次男でもなければ、シャド・スペクターなんてそこら辺の石ころと何も変わらない。

「だって、味方なんでしょ？」

「……いじめられっ子を守ってたら、そうなった」

リユネットがおかしそうに笑う。

「俺はメイリーの一番の味方で居られればそれでいいんだよ」

笑う声に合わせて呟く。

「今、何か言いました？」

「何も？」

知らん顔する。

「私どこまでやれるかわかんないですけど、自分なりに頑張ってみようと思います」

「そーしなさいな」

肉の最後の一口を口に含む。 ああ、至福。

（まったく、やれやれですな。けれども、これでメイリーを奇女に書きたてる記者が一人減ったぜ！ この嬉しい報告を誰かに……お、そう言えば今日は朝から電子コールを一度も聞いてないような）

思い出して、メッセージを受信する。よかった、三件だけだ。
なんかいろいろ着てるんじゃないかってビビったわ。うん、でもないな。今までもなかったもんな！

一件目はシュロムなので削除。聞くわけもない。
二件目は親父なので後回し。
三件目はルックだった。我慢して聞こう。

なあ、シャド昨う……

受信していると唐突に、心臓が脈を打つ。

「……っ！」

目がグルグルと回り、視界が不安定になる。まるで空を歩くように足元がなくなる。

「どお、どううしあたんでえすくああっ！」

眼鏡っ子の声がダブって聞こえる。

なんだ、これ。

俺は前のめりに倒れる。

残る意識で、即座に魔術式を解除する。

「大丈夫ですか、ねえ！　ねえ！」

近くにある顔。やっぱり、この子萌え要素隠してたな。

ただのブラウンかと思った瞳は、夕焼けの中でヘーゼル色だった。

「ほら、人のこと心配したりもできるだろ。あと、君顔近い」

ニヤリと嗤う。顔を手で押しのける。

「騙したんですねっ！」って眼鏡っ子は怒って、俺を叩く。痛いっで。

心臓付近の服を強く握る。

「夢追うのは良いけど、三流にはなりなさんなよ。じゃあな！」

手を振って逃げる。

眼鏡っ子が見えなくなった、路地の角に入ってもたれかかる。

「っ……」

額からにじみ出る汗を服の裾で拭う。

今の痛みは、お芝居。本当なわけない。今まで大丈夫だったもの。

ポニポニのところまで必死に体を動かす。

俺は平気、普通。

「ポニポニさん、マジ乗せて？」

「ぶるる？」

黒い瞳が俺を見る。

ペンダントのことが浮かんた。これ、ペンダントの呪いにしよう。
絶対そうだ。

狼青年の吐く嘘の後ろの真実は、誰も知らない。

20・嘘の後ろ（後書き）

シャドはメイリーにも甘くするだけでなく、駄目な時に怒るといいんだろぅなあ。さてさて、新展開です。シャドの体に突如異変が！ほんとにペンダントのせいなの！？あ、前にも言っただけど1ギニーは200円。つまり、600円シャドは払ったのです。せこい？男は払いたい人と払いたくない人がいるのだよ、諸君。あと、驕ってくる時は、全額を奢って貰うのはかつこ悪いので驕ってくれるなら端数だけは払わせてください。全額やられると後で心の相談会が開くはめになるので、端数だけは頼む。男ってのはビンボーでも、かつこつきたい生き物なのさ！！

21・小さな決意

「ひひいーん」

かぶつ。

「……ポニポニさん優しくして、ほんと優しくしてっ！」

地面の上で半泣きになりつつ、頭を未だに噛み続ける愛馬の口を遠ざける。傷心の俺になんて酷いの、コイツ。

(……………)

手のひらを開いては、閉じる。未だ体に残る倦怠感は拭えていないが動かすのがそれほど辛いわけでもなくなった。なった、けれども外がやたらと暗い気が……。

暗いお空には顎のつんけんした三日月型のお月さま、周りには小さな星がきらきらり。視界に映る家々には温かそうな光が灯っている。

「おん？」

夜？

あ、あれ。おかしいな眼鏡っ子と別れた時はまだ夕日が見えていたような？ 陽が沈みそうではあったが、沈んでなかったような？

き、記憶違いだな。宿のすぐそばの馬小屋で倒れてたのに、誰も見つけてくれなかったとかないない。あの時は夜だったに違いない、意識飛びかけだったし、そうだと。身長百八十センチ越えの男が倒れてて誰も心配しないとかない、ない。

心を落ち着けて、馬小屋の柵に寄りかかる。立てないわけもないが、（何か心が折れた気がするから）立って家に帰りたくない気分だ。もう、無理だ（今、どこかでポキって音がした、心かな。心だな、よしわかった）。

全ては、ペンダントの呪い引き続き続行中ってことにしようじゃないかっ！

「だばだばあ」

わけのわからない言葉を発してみる。馬をおびえさせない程度の声で。蹴られたら、怖いからねっ！

（んなわけあるか、ペンダントで片付けてたまるか。片付けたらペンダントがなかった時心がポキッといくところか、グシャッと逝くわ）

目に映る汚れをとりあえず、落とす。汚いの嫌いなんだよ、変なとこで潔癖なんだよ。譲れない綺麗さがあるのだよ。背中は良くて、

頭と体についている汚れは許せないのが俺です。

（まいったなあ、目眩とか立ち眩みで片付けるのも微妙だよな。そんな可愛いものじゃなかったし……）

「死なないといいなー、平穏でいたいなー」

ぶっちゃけ、検査は受けたくない。病気になったら病院へ行くのは常識でも、身体的問題で実験台になりに行くなんて常識じゃないもの。嫌だね、好き好んで自分の体を提供するなんてぜえったい！綺麗なお姉さんたちの看護があっても無理無理プー。

ポケットからごそごそとレインから貰ったペンダントを取り出す。

（呼んだら迎えに来てくれるんだろうが、一応疑惑のペンダントってことで使いたくない）

こうなったら最近、使った魔力をちょっと考えてみよう。

毎日電子コールに使用、回数不明。一日十回以内ぐらい、たぶん。多い日でも二十はいかない。

昨日の眼鏡っ子襲撃事件の際に突如として現れた氷柱（あくまでも偶然の産物ですが）。

指輪を見た。

指輪を見たのちょっと怪しいな、あれ久々に見たし。今日寝不足だし、もう体調不良でまとめとく？ うまく魔力が回復できなかったとかで。

もしくは、指輪の制御が効き過ぎてるとかなんじゃないだろうか？

「お馬鹿さんねえ、魔力制御装置付けてるのに使いすぎたから倒れたのよ、ダーリン（レインの声真似）」ってことなんじゃないだろうか！

「って、どっちにしろ俺の魔力がなかったってことじゃんかつ！」

「ぶるる」

「鼻息荒い、荒い。騒がないので、怒らないでください」

ポニポニから再度距離をとる。距離あるのにな、怖いな、俺主人なだけだな。きつと格下なんだろうな、泣けるな。

とにかくだ、魔法は当分使わないことにしよう。そうしよう。メッセーじは届いておりませんでいこう。皆めんどくさかったものの、良い機会じゃないか。神さまがきつと、「もう周りに関わらなくてよいのじゃよ、ほほほ」という天啓をくれたんだな、違いない。

（魔力減ってんのかなあ……そういうのもレイン教えてくれないもんなあ）

体が大きくなれば魔力も増えるんじゃないかなんて、浅はかな期待が多少は、多少は、たしよおおおはあったりもしたんですがね。

（所詮いつまで経っても、俺はモブなままってことか。……そうか、そうだよな、俺は俺だもんな。ああ、なんだか疲れた、な）

いっそ、躊躇うとかそう言う段階をすっ飛ばして、一人でどこかへ消えてしまおうか？ 男は度胸ってことで。

誰も探してくれないだろうし、いいんじゃない？　むしろ、居なくな
って「あー、清々した」って言われるんじゃないの？　メイリーだ
って、案外数日後ぐらいに「最近、シャド見ない」みたいに思い出
すんじゃないかね。

レインとかだつてなんだかんだで「ダーリン見なくなったわねえ、
誰かに解剖されたかしらあ」とか言うんだ。

何これ、皆酷い。

心根を少しばかり披露すると別段どこかに行きたくもないし、メイ
リーの結婚する姿とかは見たかった。けど、ハボンも本の中で「引
き際が肝心」なんて書いてたしな。ここらがモブの引き際なんじゃ
ないだろうか。

（欲張っちゃいけないよな、メイリーが幸せになるまで傍に居ると
か……）

俺はさ、ただメイリーに幸せになってほしかった。

弱くて小さくて泣きそうなのに泣けないあれがそんな顔をしなくな
る日がくればいいなと、思ってた。

まあ、とつくの昔に今じゃそんな可愛かった頃は露と消え、したた
かな女たちの仲間入りを果たしていたのですが、ね。

俺より強いのに後ろに隠れちゃうし（隠れるから先に隠す習性がで
きた！）、自分のこと自分でやらないし（ここら辺は甘やかした自

覚有）。女の子は自分のどこが弱いかを的確に理解してるから、その弱さを武器に馬鹿な男たちを手玉にとっちゃうんですよ、あー、怖い怖い。

転がされる男も男なんなんですが！

『スペクター伯爵子息はジャミル子爵令嬢がお好きなんですネ』

（好きじゃないよ、モブはメインキャストに恋なんてしないもの）

こい？ 池の鯉役を所望ですか？ 恋？ 残念、メインキャストに恋しているモブをお探しなら右まわれ。俺は輝かせるだけ輝かせて、終わりのなモブです。

皆の勘違いを誰か正してくれよ。

俺の場合なんて特にそうだけど、特別綺麗な子が幼馴染だっただけの話なんだよ。仮に貴族でもなかったら、知合いでもなかったら遠くから眺めて「うわあ、すごい美人！」と男どもキャッキャウフフと騒ぐだけに過ぎなかったんだって（オカズにしてたかもね！）。

残酷な神さまへ。

なぜ、いつまで経ってもメイリーが上手く笑えない小さな女の子でいさせてくれなかったんですか。

力があつて、頭が良くて、特別になれる子だったなんて知らせたのはなぜですか。

俺に力がないって事実を突き付けたりしたんですか。

俺だってヒーローのままで居たかったのに。

せめて、俺が普通なら何かもつと世界が違ったかどうか教えてくたさい。

（ああ、ほんと死にたくはないなー）

特別ななんて求めてないから、普通をください。

《シャド、グランツ王子からの手紙が届いて……》

強制的に耳に入る声を切る。

親父は、一定時間以上したら聞こえるようにしていたのだろう。なんて、最悪なタイミングだ。

諫めるためのメッセージなんて聞きたくない。そんなことで、魔力は使いたくない。

届いている全員のメッセージを削除して、全員を拒絶する。

（言うことなんて決まってるんだろ……めんどいよ）

「ポニポニ、どっか俺を遠くまで連れてって」

「ぶるうる」

愛馬のくせに首を振る。

冷たい。

俺も同じくらい周りに冷たくすればいいのだろうか？ 現実を突き付けて何もできない駄目な奴だって見せつけければ、絶望させて嫌われたらそれで自由になれるだろうか？

「だあー、もう考えるのやめた。酒飲みたい、がんがんするくらい飲みたい。もういいやここの宿屋に泊る。さよなら、ポニポニ。また、明日」

馬の制止を振り切り、よろめきながらも宿の扉に向かう。

「いらつしゃ、おやシャド坊ちゃんじゃないか、どうしたんだい？」

恰幅の良い女主人がカウンターで俺を迎える。王都の宿屋なんてのは大体地方から来た人が泊るためにやってるのだが、いつもいつも泊り客で溢れているわけではないので、ここは酒場も兼ねている。

ついでに言うならポニポニのような動物も金さえ払えば一時的には預かってくれるので、街に連れて来る必要がある時はここに預けている。

「うんと強い酒ください、部屋も貸してください。今日ここに泊ります」

「泊りだなんて珍しいねえ！ 部屋は一番端の部屋でいいかい、ほら鍵」

鈍色の鍵を受け取る。

「しかし、運が良いよ。今日は酒場の方に他所の国の歌手が来るんだよ、開いてる席に座って聞いときな」

すぐ横の酒場が有る方へ曲がるなり、人だかりができていた。中から座れそうな椅子を探し出し、酒場の端っこのカウンター席に腰を下ろす。

（あれが歌手か）

さっそく歌手手に目をやる。真ん中の舞台には褐色の肌をした女が白いサテンのドレスを着て歌っていた。濃い茶色の髪はアップにされていて、首から胸にかけてのラインが良く見える。

「ゆるやかな日差しの中で、貴方を探す。別れの日から、もう、三年も経ちました」

低いアルトの声は染みるように響き渡る。皆、酒に酔うように女の歌を聞いていた。

（くだらね）

溜息を吐いて、カウンターの方へ視線を戻す。

良い歌い手に違いないが、如何せん歌っている歌が悪い。今ばやりの恋愛の歌のようだ。聞いていると、どうやら戦場に行ったきり帰ってこない男を待つ女の歌であることが窺える。

「人が町に帰る度、貴方なのかと訊いて回るけれどいつも人違い。一筆だけでいいから便りをちょうだい。北の大地にまだいるのだと教えてください」

北の言葉に考えを改める。

（ああ、そうか）

戦場に行った男を待つ歌などではなく、これは勇者が魔王を倒すまでに旅に出た冒険者を待ち続ける女の歌だ。

北に居た魔王を倒したからってまだ、戦いが終わっていない人の歌なのだ。

魔王はなぜか、北の国で生まれる。

そのため、南は安全地帯とも言え人が多く駆り出される。男も女も関係なく。

ここに居る人たちは同じような思いを抱えた人たちなのだ。

良く見ればどの人も褐色の肌をしている。これは南の国の特徴だ。北を彼らは目指しているに違いない。まだ、誰かが生きていることを祈って。

「ひやかな月夜の中で、貴方を探す。別れの日から、もう、五年も経ちました」

（けど、なんだろ、この歌）

訊き方を変えれば、勇者を支持しない歌にも聞こえる。

勇者は世界を救えたのかもしれない。けれど、たった一人の誰かの心を救うようなことはできなかったのだと責めるような歌に。

「遠くの町まで歩いて、貴方が居ないかと訊いて回るけれどいつも空振りね。人伝手でいいから知らせをちょうだい。南の大地に帰るのだと教えてください」

運ばれて来た酒を煽る。

「賑やかなパレード、幸せそうな街明かり、いろいろ見て過ごした日々、今日も貴方の帰らぬ日々を過ごしてる」

悲しい歌なんて聞きたくもない。

「貴方を探して北へ、北に貴方は居るかしら？」

喝采の拍手。

俺は、終わった歌に拍手することもなく食べ物で頼張る。

（俺が居なくなっただ方が幸せになれるだろうか？ 皆、喜ぶだろうか？）

勇者ですら誰かを救えなかったというのに、幸せにするなんておこがましい。

21・小さな決意（後書き）

毎日が30時間あればいいのに、寝る時間として12時間毎日欲しい。10時間は仕事と勉強。8時間は小説とかの構想してたい。シヤド達の世界は18で成人。

22・国と人

『世界平和共同戦線条約の下、我々は「魔王」のせん滅に励んでいるからだよ』

八つの時、本を読むようになって俺は親父に質問した「なぜ、自分たちの国を方位で呼ぶのか」と。

七、八の歳になるとほとんどの子供は文字の読み書きを習い始める。裕福な子は家庭教師を雇い、雇うことができない子供は日曜日に教会で修道士たちが開く日曜学校へ通うことで教わることができる。

王立学院など学校は魔力の使い方を学ぶだけの場所だ。そんなことができて当たり前として授業が進んでいく。

魔力を使用するにあたり、俺たちは世界の魔に関わる全てのものを習わなければならない。

魔力、魔法。魔術、魔石。魔術、魔獣。そして——魔王に関わるものを。世界平和共同戦線条約もその一つだった。

世界平和共同戦線条約は今から遡ること五百八十一年前に、この大陸の国々の偉かった過去の誰かが決めた法律であり、「魔王」と呼ばれる存在が世界に知られた日でもあった。

世界には三つの大陸があり、名をサバーフ、ディール、ノクスと呼ぶ。

俺たちが住むのはサバーフ大陸というのだが、本当にディールやノクスと呼ばれる大陸があるのかは定かではない。海を隔てたその向こうに行くことができないからだ。

魔獣は魔王が生まれるずっと前から存在していた。当然だ、魔獣とて母胎に居るうちに魔臓が生成されるのだから。

魔獣とそうでない獣の違いは単に、人を害するか害さないかで決まり、更に言うなら海には魔獣しか居らずより手ごわいと、される。人間が海に出るには船しかなく船の上からしか戦うことができないが、やつらにとっては全てが戦場になるという点が大きいだろう。その為、よほど強い魔術師が居ないでもない限り海に出ることはできない。

それだけでなくも他の大陸がどこにありどのくらいの時間が行くのに

かかるのかわからないのだ、行きようもなかったと言えた。

仮に魔術で転移するにしても、大量の魔力が必要になる上に、これも正確な場所がわからなければ海の上にドボンと落ちて魔獣の餌になるのがオチだ。

成功したとして、同じような奇跡的な確立でしか帰ることができない。だから、誰も行ったことがない。あるのかわからないものになっている。

サバーフ大陸には十二の国が事実上存在する。

それを東西南北と中央の五つに分けてこれをその方位に合わせて、東の国。もしくは大地などと呼ばれている。

東、西、南にそれぞれ三つ。中央に一つ。最後に、北に二つ。

中央がここスイリディーナ国であり、北を目指すにあたって他国からの物資の豊富さが売りで最も魔術が発展している国のため、魔術師を探す目的でも立ち寄られている。その点からすると、北へは比較的穏やかなルートで行けるだろう。

また、北の二国のうち一国は国として存在するものの事実上は、魔石を得るために存在する大きな街にすぎない。

市場に流れる魔石のほとんどは北の国で採取されたものだ。他の国でもとることができるがここほど上質なものはなく、また大きい魔石はとることができないためにやむを得ず設置されたものと言える。

もう一国は、魔王が住む領土を国とし、敵国の危険区域として分けられている。世界平和共同戦線条約のみそはここだ。

以前はお互いどの国がどの国を攻め、領土を広げるかというのに勤しんでいた昔の人々が仲良く手をとるにはお互いの国の境目を失くすほかなかったのだ。

世界平和共同戦線条約とはいうなれば、「魔王を倒すまでは友達でいましょうね」という半永久的停戦を意味する。

一つの敵に立ち向かうため、全ての国は一つになった。名を伏せ、一つとした。

そうは言うものの当初はこれを守らず中央の魔術師の誘拐や、全ての国による北の魔石の争奪戦などが繰り広げられていたらしい。やつのことでこの条約が意味を持ったのは、死者の数が人口の三割を越えた時点だったと言われている。国々は事の重大さに気付き「協力してのせん滅」になったのだと、歴史ではそう学ぶことができる。

北の国でしか魔王は生まれない。

なぜ生まれるのかは、六百年近く経とうとする今もわからない。五百八十一年前、「魔王」は突如として生まれ以降いくら倒そうとしても不定期に「魔王」が現れるのだ。

尚、魔王が現れた場合、最低でも二千の兵士を出さなくてはならないが、これはこの中央の国の最低人数だ。魔術が発展している一方で、中央は小国だからこそその人数だった。

対して、他の三国は五千から一万の兵を出すことが義務付けられている。

今回現れた魔王は六年間もの間、北の国に居た。「勇者」が倒すまで、ずっと。

中央からは大人で魔術師として戦える人が兵として出て行っていただけなので俺というか、魔術の才がない者と騎士団に属さない者はまったく言っていないほど、関係がなかった。

ルックは軍学校を卒業してもまだ魔王が居た場合、戦場に出ているかもしれないが……。

それに比べると三国は教育制度の違いもあつて魔法を使える者は多く居ても魔術師が居ないため、根本的に兵として多くの人間が戦場に出て行かざるを得なかった。

「にいさん、わの歌は退屈かね？」

酒を飲み始めてからどれくらい経った頃だろうか、いつの間にやら白いサテンの女が目の前に居た。歌っていた時とは違い南の強い訛り言葉で、こちらを侮蔑するようにそう彼女は言う。

年齢はレインよりも見た目的には年上に見えるが、実際は二十中頃だろうか。褐色の肌に、黒い髪の子だった。

「退屈かね？」

他の客たちの視線がここに集約される。見覚えの顔がないことに、

今さらながらに気付く。色の違いはあれど、ここに今日居るのは三
国の人間ばかりだったのだろう。

下手に騒ぎにするのも良くないと、俺は曖昧に笑う。

「ちよいと歌い手さん、坊ちゃんに絡むのはやめてくんな」

女主人がすかさず、声を掛けてくる。すぐ後ろでは、いかつい料理
人も麵棒を手に構えていた。

（退散したがいいな、これは）

金を置いて、席から立ち上がる。

「鍵返すよ」

貰った時と同じように、投げて返す。

俺はへらつと笑ってその場を後にしようとするが、ガツと腕を掴ま
れたかと思う間に天井を見上げていた。

掴まれている右腕と衝撃を和らげるような物のなかった背中の痛み
に、俺は声のない悲鳴を上げる。

「退屈かね？」

「坊ちゃん！」

右腕を女主人が取り返し、俺を起こして背を摩る。

「いほ、いほっ」

元々不調だった体だが今の一撃でまた、倒れる前と同じように視界が廻り出す。

「ぼうっあん、ぼうっあんっ！」

響く声を抑えようにも、今度は魔術式も何も浮かんでいない。ただ、胸を押さえて呻いた。

「大丈夫、ぶ。心配い、らない、……っあ、ふう、……ひう……背中を強く打った、ただだ」

呼吸を落ち付け、女主人を安心させようとするがなかなか治まらない。

「あんたたち、シャド坊ちゃんに何をしてくれるんだい！ 酔っ払いどもが、出てっておくれっ！」

服を掴む。夜もそろそろ遅い。彼女らはこのままでは宿がなくなってしまうだろうし、何より女主人の沽券にも関わるかもしれない。

「俺が、出ていく。この人たちは、このまま……」

「背の割にひよろいと思えば病氣持ちかね、中央は魔術師になれん人間も多いけえ、南やら他の国が人を出すことになるんぞ」

この女馬鹿かよ、人がせつかく穏便に済ませようとしてるのに。これだから、喧嘩っ早いチート組は嫌いなんだよ、もう、馬鹿じゃないの。馬鹿でしょ、ばーか、ばーか、げげげぼ。

「高い酒に、旨い飯。中央はええのう」

嘲りに、周りが頷く。どの顔も既に赤く、酔いが回っていることが見てとれた。

（しくつたな、家に帰ればよかった……）

女は素面のように思えたが、周りの男たちは何がきっかけで暴れ出すかわからない。条約の所為で表立って喧嘩するような人間も居ないが、喧嘩した場合の処罰は両成敗ということではいかなる理由があるうともお互いに同じような刑罰が下される。

「他所の国の歌なんてどうでもいいがや？ さすが、勇者様を輩出する国は凄いのう」

「気分を、害したな、ら謝るよ」

「喋り方も上品なこつて、坊ちゃん？」

引かせてくれないらしい。

「坊ちゃん、もういいよ。誰か、騎士団の人を誰か呼んどくれ！十代の子供相手に、あんたたちも大人げないよ！！」

一応、成人しているのだが、長らく馬を預けている所為か、彼女の中では俺はまだ子供らしい。あれ、なんかこつちの方がダメージを受けるな、なんだ。

「酔っ払いと言えど、無抵抗な相手に……しかも、うちの国の貴族に喧嘩売って同じ刑罰だと思わないことだね！」

「十代？ 貴族？」

信じられないと言わんばかりの顔で、女は俺を見る。

ははははー、モブのプチ常識。年齢は上から下まで五歳は憚れるのさ！ モブなので、いろいろな役になれるのさ！

「俺も悪かった、から、呼ばなくていい」

十五になれば、他国は戦地へ行く子も居る。人の心を酌めなかった、俺も悪かったのだ。

落ち付いてきた呼吸に安堵し、立ち上がって出口へ向かう。
もう、女主人以外誰も引き止めなかった。

馬小屋の柵に体重をかけつつ、体を支える。

（ペンダントどころか、マジで体不調すぎる。やばいな）

このままポニに乗って無事に帰れる気がまったくしない。

「ハニー、僕はどうかでここに泊りのようです。お願いだから蹴らないでね？」

「ひひいん」

「嫌だ」と言うように馬は鳴いた。俺は藁の上で膝を枕に目を瞑る。

「ぐほう、せ、背中が朝のこわばり並に痛いっ！」

争いは誰しもを傷つける。平穏が一番だ。

女主人は、客と仲良くすればいい。

旅人は、国の人に優しくされればいい。

人は、誰かの痛みを知って泣けなければならない。

冷たくしたら、冷たくされるのは常。

優しくしたら、優しくされるかもしれない。

世界平和共同戦線条約。それは、そのためのもの。

22・国と人（後書き）

三連休は毎日更新したいwあと、予想よりも話数が伸びそうだった
りする！シヤド達の世界じゃ魚は食べない仕様となっており、
もったいない。そして、青は投稿するとか言いながらPCに伏して
寝てたよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5427w/>

勇者が敵になりました

2011年10月9日12時59分発行